

令和元年度・令和2年度

公共ホール邦楽活性化 モデル事業報告書



一般財団法人 地域創造
Japan Foundation for
Regional Art-Activities

■はじめに

一般財団法人地域創造では、地域における創造的で文化的な芸術活動のための環境づくりを目的として、地方公共団体等との緊密な連携の下に、地域における文化・芸術活動を担う人材の育成や、公立文化施設の活性化を図るための各種事業を実施しています。

これらの事業の一環として地域創造では、平成22年度より、都道府県や政令指定都市を対象とした邦楽地域活性化事業に取り組んできましたが、この度、枠組みを市町村対象に変更し、まずはモデル事業として「公共ホール邦楽活性化モデル事業」を、令和元年度・2年度の2年間に渡り実施しました。

公共ホール邦楽活性化モデル事業は、これまでの邦楽地域活性化事業に参加された演奏家と、専門家であるコーディネーターを市町村に派遣し、公共ホールと演奏家が共同で企画した参加体験型の地域交流プログラムと、コンサートなどのホールプログラムを実施するものです。地域創造では、本事業を通じて、公共ホールの利活用やホールスタッフの企画・制作能力の向上、日本の伝統音楽の継承発展、豊かな地域づくりに資することを目的としています。

この報告書は、令和元年度・2年度合わせて6団体（うち2団体は新型コロナウイルス感染症の影響で本番未実施）との共催により実施された、公共ホール邦楽活性化モデル事業の内容を取りまとめたものです。

報告書の中では、実施団体からの報告に加え、担当者による、事業を実施しての成果や反省点・課題を掲載しております。また、各団体に派遣されたコーディネーターによるレポートを掲載し、事業に関して気づいた点や、企画・制作のノウハウ、事業を実施する過程において生じた様々な課題や問題点を、ケーススタディとして記録しています。あわせて令和2年度については、邦楽アウトリーチの実例として、各チームの地域交流プログラムの実施内容を簡易的にまとめた、進行シートも掲載しました。

全国の地方公共団体ならびに公共ホールのみならずにおかれましては、ぜひ邦楽に関する地域交流プログラムも含めた自主事業にお取り組みいただき、本報告書をご活用いただければ幸いです。

結びに、各公演を主体的、積極的に実施いただいた実施団体、事業実施にあたり貴重なアドバイスやご尽力をいただいたコーディネーター、各地域に寄り添ったプログラムを実施していただいた演奏家、その他多くの関係者の皆さま方のご協力のもと、公共ホール邦楽活性化モデル事業を実施することができましたこと、この場を借りて深く感謝申し上げます。

一般財団法人地域創造

目 次

I.	公共ホール邦楽活性化モデル事業の概要	5
	実施概要	6
	事業の流れ	7
	チーフコーディネーター報告	8
II.	令和元年度公共ホール邦楽活性化モデル事業の概要	9
	事業体制	10
	演奏家プロフィール	11
	全体研修会概要	12
II-2.	令和元年度公共ホール邦楽活性化モデル事業報告	13
	＜埼玉県東松山市＞	
	実施団体報告：菊地 俊孝、中山 智恵（公益財団法人東松山文化まちづくり公社）	14
	コーディネーター報告：米澤 浩	18
	サブコーディネーター報告：田中 元樹	20
	＜岩手県釜石市＞	
	実施団体報告：中村 仁彦（釜石まちづくり株式会社 事業部市民ホール事業課 釜石市民ホール TETTO 事業係長）	23
	コーディネーター報告：谷垣内 和子	27
	サブコーディネーター報告：丹羽 梓	30
III.	令和2年度公共ホール邦楽活性化モデル事業の概要	33
	事業体制	34
	演奏家プロフィール	36
	全体研修会概要	38
III-2.	令和2年度公共ホール邦楽活性化モデル事業報告	41
	＜熊本県熊本市＞	
	実施団体報告：光永 綾音、吉田 愛（熊本市市民会館）	42
	コーディネーター報告：米澤 浩	47
	進行シート：丹羽 梓	49
	＜香川県高松市＞	
	実施団体報告：堀 有紀子（公益財団法人高松市文化芸術財団）	51
	コーディネーター報告：伊藤 由貴子	56
	進行シート：田中 元樹	59
	＜埼玉県上里町＞	
	実施団体報告：高橋 達也（一般財団法人上里町文化振興協会 管理兼業務係）	61
	コーディネーター報告：谷垣内 和子	65
	サブコーディネーター報告：丹羽 梓	67
	＜埼玉県秩父市＞	
	実施団体報告：松村 剛雄、高井 真明（秩父市市民部秩父宮記念市民会館）	69
	コーディネーター報告：米澤 浩	75
	進行シート：大久保 真利子	77

IV.	参考資料	81
	邦楽地域活性化事業アーティストプロフィール 付随資料：谷垣内 和子	82

I . 公共ホール邦楽活性化 モデル事業の概要

公共ホール邦楽活性化モデル事業 概要

1 趣 旨

地域における芸術活動を担う人材の育成および環境づくりに寄与し、あわせて創造性豊かな地域づくりに資することを目的とし、市町村等との共催により、公共ホール等を拠点とした、邦楽演奏家による地域交流プログラムに関する事業を実施する。

2 対象団体

市町村（政令指定都市含む）または市町村の設置する公の施設の管理を行う指定管理者等。

3 事業内容

(1) 研修事業

① 全体研修会

実施団体の担当者を対象に、邦楽事業の実施に必要な実践的ノウハウを取得するための研修会を開催。

② 個別研修

担当コーディネーターが現地での事前打合せや会場下見を実施、事業の円滑な実施のための助言を行った。

(2) 公演事業

① 地域交流プログラム（アクティビティ）

学校等でのアウトリーチ（ミニコンサート）など、地域との交流をはかる事業を原則として4回（1日につき2回）実施。

② ホールプログラム

公共ホール等において邦楽コンサートまたは公募型ワークショップを実施（原則として1回）。なお、コンサートは有料公演とし、入場料収入は実施団体に帰属する。

4 経費負担

事業実施に伴う下記の経費については、一般財団法人地域創造が負担する。

(1) 演奏家派遣に係る経費

出演料、現地移動費を除く交通費・宿泊費等、派遣に係る保険料、楽器運搬費（現地運搬費を除く）。

(2) コーディネーター派遣に係る経費

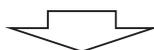
謝金、現地移動費を除く交通費・宿泊費等、派遣に係る保険料。

(3) 地域交流プログラム負担金

実施市町村が支出した地域交流プログラムに係る経費のうち、楽器運搬費およびこれに準ずるものとして特に地域創造が認めたもの。（限度額10万円）

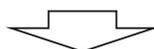
■全体研修会

- ・ 事業説明、アウトリーチや邦楽についての基礎講座
- ・ 過去の事業実施事例紹介
- ・ 演奏家によるプレゼンテーション
- ・ 実施団体担当者によるプレゼンテーション
- ・ 演奏家、コーディネーター等との顔合わせ・グループミーティング



■事前準備

- ・ 地域交流プログラムの実施先調整
- ・ ホールプログラム概要の検討、広報準備

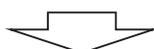


■個別研修（現地下見）

- ・ ホール、地域交流プログラム実施先の下見
- ・ ホールプログラム、事業全般についての打合せ

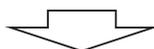
■実地研修（演奏家のためのプログラムづくり研修）※令和2年度から導入

- ・ 地域交流プログラムランスルー（通し稽古）とブラッシュアップ
- ・ その他、ホールプログラムに関するミーティング等



■地域交流プログラム（アクティビティ）

- ・ 学校、福祉施設、文化・観光施設等でのミニコンサートやワークショップ



■ホールプログラム

- ・ ホールでのコンサートまたは公募型ワークショップ

邦楽活性化事業 市町村モデル 2019～2020年度 を振り返って

2009年に始めた邦楽活性化事業は実施県が主体となって県内の市町村と協働して行うスタイルでおこなってきた(2012年だけは政令市と区の会館)。県は、市町村のまとめ役的な役割を担い、主にアウトリーチアクティビティのプログラムやワークショップ(楽器体験)などの手法開発をアーティストと主に行うこと、また最後に県の会館を活用してのガラコンサートを行う。また、市町村はアウトリーチ先(基本的に学校)との調整や市の会館を使ったコンサートまたはワークショップを実施するという一方で、県と市町村の会館の連携を強めつつ、邦楽や邦楽アーティストの活用を公共ホールに考えていってもらいたいというのが趣旨だったように思う。

また、邦楽のアーティストに公共的な役割を果たしていくアウトリーチプログラムへの理解を深めていってもらうためにも、アクティビティの内容づくりにコーディネーターとともに本気で取り組んでもらう方が良いのではないかという部分もあった。

実施県とのプログラムであるこのやり方は、県の会館(特に職員)の負担がやや大きいことなどから、市町村の会館が直接申し込める方法(洋楽でのおんかつの手法)へと変更することにしたのが2019年度からである。市町村モデル事業では、それぞれの会館は、関わって頂いた9年分のアーティストのリスト(冊子)から希望を出し、邦楽事業の専門家であるコーディネーターの意見と調整しながら派遣されるアーティストを決めていく、と言う手法がとられた。

コロナの影響もあって実施が中止になってしまった市町村はあったとはいえ、中止延期が多かった2020年度の中では実施できた割合が多かったのは、たまたま時期的幸運があったと言えなくもないが、それだけではなく、早い時期に仲間になるアーティストを決め、事業のイメージを膨らませていただいていたこともプラスに働いた可能性があると考えている。実際、実施に同行させていただいて、それぞれの会館の担当者が、With Covid19という難しい条件にもかかわらず、アウトリーチの目的などをよく吟味、邦楽の多彩な可能性を意識してアーティストたちに対峙して下さったという印象が強い。

特に、アウトリーチでは自由な発想で、地域とアーティストを結びつけて欲しいという私の密かな願いをかなえて、教育だけでなくコミュニティ・エンゲージメントと言う視点から、手法の可能性を探ることを各会館の担当者が意識して下さったように見えるのは大変有り難かった。邦楽や邦楽のアーティストがコミュニティと四つに組むような(学校もコミュニティと考えれば音楽教育以外へもやり方は拡大していけよう)事業の面白さと可能性を感じる事が出来たのが、この2年間の一番の収穫だったかもしれない。

With Covid19で、特に3つの小を標榜するアウトリーチでは今までの手法が通用せず新たな方法を探すという一年だったと思うけれども、変わっていく社会の常識に、企画者やアーティストが身につけないと、と思ったのは大きくいって2つある。

1. 話術 = 演奏者にとって話術は専門外なのでメッセージ性で気持ちを強めることが優先だったけれど、もっと語順や語感そのほかはまだ工夫できるだろう。
2. ワークショップ的能力 = ワークショップが楽器体験を越えて、聴くことも含んだ音楽的体験だと考えるならば、音楽で取り組まれ始めたワークショップ運営のスキルは役立つこと。発想を少し変えることができるのが随分あるだろうこと

それによって、アウトリーチの効果が上がる可能性を感じるし、面白そうな期待がある。今後オーディションや研修を通じて出来れば良いなと思っていることの一つである。

Ⅱ. 令和元年度公共ホール 邦楽活性化モデル事業の概要

令和元年度公共ホール邦楽活性化モデル事業実施体制

- ◎主催団体：釜石まちづくり株式会社（釜石市民ホール）、公益財団法人東松山文化まちづくり公社
- ◎共催団体：一般財団法人地域創造
- ◎主催団体担当者
 - 中村 仁彦（釜石まちづくり株式会社 事業部市民ホール事業課 釜石市民ホール TETTO 事業係長）
 - 中山 智恵（公益財団法人東松山文化まちづくり公社）
- ◎チーフコーディネーター〔地域創造の派遣する専門家〕
 - 児玉 真（一般財団法人地域創造プロデューサー）
- ◎コーディネーター〔地域創造の派遣する専門家〕
 - 谷垣内 和子（公益社団法人日本芸能実演家団体協議会実演芸術振興部企画室長）…釜石市担当
 - 米澤 浩（邦楽演奏家、NPO 法人日本音楽集団副代表）…東松山市担当
- ◎サブコーディネーター〔地域創造の派遣する専門家〕
 - 丹羽 梓（横浜国立大学大学院博士後期課程）…釜石市担当
 - 田中 元樹（指揮者）…東松山市担当
- ◎演奏家
 - 岡村 慎太郎（箏曲）、山形 光（箏曲）、黒田 鈴尊（尺八）…釜石市担当
 - 箕田 弘大（三味線）、都築 かとれ（三味線）、新保 有生（篠笛・能管）…東松山市担当

■事業実施日程

◎研修

実施内容	実施日	会場
全体研修会	5月21日（火）～22日（水）	地域創造会議室

◎市町村公演

実施団体	担当演奏家等	内容	実施日	学校、ホール名
釜石市	岡村 慎太郎 山形 光 黒田 鈴尊 ＜コーディネーター＞ 谷垣内 和子 ＜サブコーディネーター＞ 丹羽 梓	アウトリーチ①	3月5日（木）	
		アウトリーチ②	3月5日（木）	
		アウトリーチ③	3月6日（金）	
		アウトリーチ④	3月6日（金）	
		コンサート	3月7日（土）	釜石市民ホール TETTO ホールB又はA
東松山市	箕田 弘大 都築 かとれ 新保 有生 ＜コーディネーター＞ 米澤 浩 ＜サブコーディネーター＞ 田中 元樹	アウトリーチ①	11月6日（水）	
		アウトリーチ②	11月6日（水）	
		アウトリーチ③	11月7日（木）	
		アウトリーチ④	11月7日（木）	
		コンサート	11月17日（日）	東松山市民文化センター

※釜石市は新型コロナウイルス感染症拡大防止のため本番中止。

◎総括

実施内容	実施日	会場
総括会議（コーディネーター会議）	3月	地域創造会議室

演奏家プロフィール

◎：代表者

[埼玉県東松山市担当]

◎^{みのだ こうだい} 箕田 弘大 長唄三味線・作曲

東京生まれ。長唄三味線演奏家。幼少より尚美学園子供音楽科にて、ピアノ、ソルフェージュを習う。2006年東京藝術大学（長唄三味線専攻）卒業。第26回市川市文化振興財団新人演奏家コンクール最優秀賞、第3回K邦楽コンクール古典部門（大学・一般の部）1位優秀賞を受賞。TVドラマ「タイガー&ドラゴン」、周防正行監督作品「舞妓はレディ」等の音楽制作をはじめ、煌★バンドCD「和楽器DE MUSIC FOUNTAIN」の収録にも参加。日本音楽集団、和楽団 煌、長唄東音会所属。昭和音楽大学非常勤講師、新潟市ジュニア邦楽合奏団講師など、東京を中心に新潟、仙台にて指導している。海外公演も多く、古典から現代、作曲活動から音楽教育まで、国内外で幅広く活動している。

◎^{つづみ} 都築 かとれ 長唄三味線

2016年東京藝術大学音楽学部邦楽科長唄三味線専攻卒業。長唄東音会、長唄協会所属。三味線を東音箕田弘大氏、長唄を東音西垣和彦氏に師事。2017年World Baseball Classic開幕式にて音楽隊として参加する。2017年大学時代の同級生とのグループ「紡ぎ会」結成。第一回演奏会を行う。2018年三味線とピアノ編成による「アキトリトリ」自主公演を開催。各音楽教室にて個人やグループでの指導を行い、近年海外での演奏活動も広げる。同じく三味線奏者である弟、都築明斗と姉弟での演奏活動も行う。

◎^{しんぼ ありあ} 新保 有生 篠笛・能管

東京藝術大学音楽学部邦楽科邦楽囃子専攻卒業。在学中に安宅賞受賞。篠笛・能管を鳳声晴由氏に、打物を堅田喜俊氏に、三味線を杵屋勝十郎氏に師事。幼少よりピアノ・ソルフェージュを邦楽器と並行して学び、洋・邦の枠に捉われない音楽感覚を養う。また邦楽器を使った作曲も手掛け、在学中に邦楽器楽曲『海』、邦楽ミュージカル『THE RYOUNKAKU』を作曲。音楽を通しての児童教育に力を入れ、地元の小中学校などで自作曲を使っての演奏や楽器体験講座を行う。古典曲から現代曲、バンドまで、幅広いジャンルで全国を舞台に活動中。「サントリーオールフリー」CM曲やゲーム「龍が如く 維新編」に篠笛で参加。元学習院中等科非常勤講師。現在、日本音楽集団所属。国立音楽大学講師補助。

[岩手県釜石市担当]

◎^{おかむら しんたろう} 岡村 慎太郎 生田流箏曲

佐野奈三江・上木康江の両師から箏・三絃を学び、胡弓を中井猛師に師事。95年東京藝術大学音楽学部邦楽科卒業。在学中に宮中桃華楽堂にて御前演奏。97年東京藝術大学大学院音楽研究科修了。翌年、東京藝術大学推薦による奏楽堂デビューコンサート「岡村慎太郎リサイタル」開催。地歌箏曲の古典に心を寄せ、三味線組歌・箏組歌を菊藤松雨師に師事（06年両巻伝授）。99年NHK邦楽オーディション合格、第34回宮城会箏曲コンクール1位、第6回賢順記念箏曲コンクール奨励賞。02年第7回「静岡の名手たち」オーディション合格。16年第22回くまもと全国邦楽コンクール最優秀賞、文部科学大臣賞受賞。この間、04年文化庁新進芸術家国内研修生、06年京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター共同研究員（～07年）。09年エリザベト音楽大学講師として研究・指導に関わる。10年（財）日本伝統文化振興財団邦楽技能者オーディション合格に伴いCDを発売。その他、Eテレ「にっぽんの芸能」、NHK-FM「邦楽のひととき」など、録音や放送での演奏機会も多い。国立劇場主催公演では「三曲の会」「名曲で知る邦楽の世界」「日本音楽の流れ」等に出演。現在、宮城会、紫桐会、はくが会、森の会、(公社)日本三曲協会、生田流協会の各会員。箏組歌同人。NHK文化センター柏教室講師。

◎^{やまがた ひかり} 山形 光 生田流箏曲

幼少期より宮城社大師範・田中佐久子氏、後に宮城社大師範・矢崎明子氏に箏・三絃を師事。東京藝術大学音楽学部邦楽科生田流箏曲専攻卒業。各地の小中学校・中学校などで特別授業の講師を務め、学校公演を行う。また公共施設や福祉施設など様々な場所でのワークショップ開催やイベントへの出演、演劇・ミュージカル音楽への参加など、古典に捉われず現代曲や洋楽器とのコラボレーションも積極的に行い、幅広く活動している。宮城社師範。日本三曲協会・森の会・若水会、各会員。和楽器オーケストラあいおい・和楽器アンサンブル真秀、各メンバー。

◎^{くろだ れいそん} 黒田 鈴尊 尺八

人間国宝・二代青木鈴慕、三代青木鈴慕に師事。早稲田大学人間科学部、東京藝術大学卒業、同大学院修士課程修了。第二回利根英法記念邦楽コンクール最優秀賞受賞。国際尺八コンクール 2018 in ロンドン優勝。山本和智作曲「Roaming liquid for shakuhachi and orchestra」を世界初演。ベルギー・ARS MUSICAにて武満徹作曲「November Steps」他、Claude Ledouxの新作尺八コンチェルト他を世界初演。2019年には日本で Rafael Nasif 作曲の尺八とオーケストラ作品を世界初演。アンサンブル室町（佐治敬三賞受賞）、邦楽四重奏団（1stCD「野田暉行邦楽作品集」は「レコード芸術」誌にて特選盤、「音楽現代」誌にて推薦盤を獲得）、1÷0メンバー。毎年独演会や数多くの委嘱、オーケストラとの協奏曲等やジャンルを横断する活動を通じて、尺八の今とこれからの無限の可能性を追求。CDや劇伴、TV放送などにも音源提供多数。令和元年度文化庁文化交流使として世界各国にて演奏活動を行う。

令和元年度公共ホール邦楽活性化モデル事業 全体研修会実施概要

- 1 概要 令和元年度の実施団体担当者を対象として、当事業の基本的な考え方や邦楽の基礎、過去の事例紹介などのゼミを行った。2日目には派遣演奏家と実施団体担当者にそれぞれプレゼンテーションをしていただき、演奏家がこれまでどのようなアウトリーチを行い、レパートリーを持つのか、また、主催となるホールの基本情報や事業実績などについて、理解を深めあった。プレゼンの内容も参考にチームごとのキックオフミーティングを行い、事業のスタートを切った。
- 2 参加者 令和元年度実施団体担当者
- 3 日程 令和元年5月21日（火）、22日（水）
- 4 会場 一般財団法人地域創造 会議室

5 全体研修会スケジュール

月日	時間	内容
5月21日	14:00	開会
	14:00 ～14:30	30分 地域創造挨拶・事業概要説明
	14:30 ～15:30	60分 アウトリーチ概論／児玉チーフコーディネーター
	15:30 ～15:45	15分 休憩
	15:45 ～17:00	75分 市町村事例と邦楽公演の制作について／川神真由美氏（H28年度邦楽地域活性化事業実施団体担当者）及び米澤コーディネーター
	17:00 ～17:15	15分 休憩
	17:15 ～18:00	45分 邦楽のいろは／谷垣内コーディネーター
	18:30～	意見交換会／邦楽演奏家、コーディネーター、サブコーディネーター、実施団体担当者、地域創造スタッフ
5月22日	10:00 ～10:30	30分 演奏家によるプレゼンテーション（各チームリーダーからのお話、15分×2組）
	10:30 ～11:00	30分 実施団体担当者からのプレゼンテーション（15分×2団体）
	11:00 ～14:30	150分 グループミーティング（昼休憩含む）
	14:30 ～15:00	30分 発表・まとめ
	15:00	終了

Ⅱ-2. 令和元年度公共ホール 邦楽活性化モデル事業報告

実施団体：公益財団法人東松山文化まちづくり公社

実施時期：令和元年11月6日（水）～7日（木）、令和元年11月17日（日）

出演アーティスト：簀田 弘大(三味線) 新保 有生(篠笛・能管) 都築 かとれ(三味線)

アクティビティ

タイトル：いざ邦楽の世界へ！

期 日：令和元年11月6日（水） 13：00～15：20

会 場：東松山市民文化センター 大会議室

参 加 者：松山茶華道連盟 29名

東松山茶華道連盟加盟者およびそのお弟子さんを対象に行った。
演奏終了後、演奏家自身が茶道、華道の体験をした。

13：00～14：00 演奏

14：00～14：40 華道体験

14：40～15：20 茶道体験



タイトル：いざ邦楽の世界へ！ @箭弓稲荷神社

期 日：令和元年11月6日（水） 17：00～18：00

会 場：箭弓稲荷神社 拝殿

参 加 者：箭弓稲荷神社関係者 49名

東松山市の観光資源である箭弓稲荷神社拝殿にて演奏会を実施。
神社関係者、神社近隣の自治会長、神社ボランティア、ロータリー
クラブ会員を対象に行った。

拝殿での演奏会開催は初めてであった。



タイトル：アーティスト in school

期 日：令和元年11月7日（木） 11：40～12：25

会 場：東松山市立松山第一小学校 音楽室

参 加 者：東松山市立松山第一小学校 4年2組38名

小学校4年生を対象にアウトリーチを行った。45分の間に演奏に
加え、それぞれの楽器の説明もあり、児童たちはそれぞれの楽器の
音の違いも楽しんでいた。最後に演奏した「勸進帳」では、簀田さ
んの迫力ある歌声にも驚いていた。また、給食交流も行った。



タイトル：アーティスト in school

期 日：令和元年11月7日（木） 13：45～14：30

会 場：東松山市立松山第一小学校 音楽室

参 加 者：東松山市立松山第一小学校 4年1組37名

同日の午前中に引き続き、松山第一小学校4年生を対象にアウト
リーチを行った。こちらのクラスは、演奏の前に給食交流を行った。
同じ内容のアウトリーチではあるが、演奏家が入ってきたときの雰
囲気が和らいでいたように感じた。



コンサート

タイトル：はじめて見て、聞き、知る、三味線と笛のいろは！
いざ歌舞伎音楽の世界へ！ ～江戸長唄から現代へ～

期 日：令和元年11月17日（日） 開場13：30 開演14：00

会 場：東松山市民文化センター ホール

参加者：328名

オープニングに華道パフォーマンスとのコラボレーションを実施した。アクティビティで協力していただいた東松山茶華道連盟の2名の方に出演したいただき、箕田さんと共演した。

1部：歌舞伎音楽／2部：現代音楽



① 応募の動機・事業のねらい

平成21年よりおんかつに取り組み、以後10年おんかつのスタイルを踏襲してアウトリーチを実施しています。今後はクラシック音楽だけでなく、邦楽でのアウトリーチに取り組み、アウトリーチの幅を広げたいと考えた。

② 企画のポイント

東松山市では行っていなかった邦楽分野でのアウトリーチの機会であるため、これまでアプローチできなかったチャンネルへのアプローチ。

③ 企画実現にあたり苦勞（問題となった）した点

- ・学校以外のアクティビティ先の決定
- ・コンサートの集客

④ 上記③をどのようにクリアしたか

- ・アプローチできていなかったチャンネルへのアプローチを目標としていたので、ほとんど繋がりのなかった団体等へアクティビティの提案をした。事業の説明はもちろん、私たちの今までの活動等も説明し、理解を求めた。決定とならなかった団体もあったが、理解も得られ、今回の2つの団体に受け入れていただけた。
- ・コンサートのオープニングに華道パフォーマンスを行った。アクティビティで交流した東松山茶華道連盟の方にステージ上で演奏に合わせてお花を活けていただいた。邦楽と華道が共演することにより、邦楽だけでなく華道に興味のある方へのアプローチを集客につなげた。また、アクティビティで一度演奏を聴いた方たちが、もう一度、演奏を聴きにホールへ来場して下さった。

⑤ 事業を実施しての成果

今まで、直接関りを持つことのなかった方たちとの連携ができた。今回、事業を通していろいろな話をしていく中で、私たちだけでなく、お互いに関りを求めていることがわかった。今後は、積極的に連携していきたい。

⑥ 事業を実施しての反省点・課題

今回だけで終わらせるのではなく、今後どのように繋がりを継続させていくかを考えなければならぬと感じている。私たちが相手のことを知ることとても重要だということを再確認できたので、文化団体に限らず、市内の様々な団体との輪が広がるような事業展開を検討していきたい。

⑦ 今回の事業を通じて、自身の「町」または「ホール」について改めて考えたこと

ホールで、どのような事業に取り組んでいるのかをあまり知らなかったという率直なご意見をいただいた。私たちが積極的にアプローチすることにより、少しずつ知っていただき、ホールを身近に感じてほしいと改めて感じた。

【参考資料】チラシ

はじめて見て、聞き、知る、三味線と笛のいろは！

いざ歌舞伎音楽の世界へ！

～江戸長唄から現代へ～



江戸・幸四郎(フヂイシゲ)
歌舞伎音楽 入白、少
歌舞伎十八番(船橋)

2019年11月17日(日)開演 13:30 / 開演 14:00
東松山市民文化センターホール

チケット料金
全席自由・指定
一般1,000円
学生1,100円
小学生1,300円

チケット代
11月14日(木) 12時・12時45分
11月15日(金) 朝10時・12時45分
11月16日(土) 朝10時・12時45分
11月17日(日) 朝10時・12時45分
※この公演のチケットは、他公演と同時発売ではありません。
※この公演のチケットは、他公演と同時発売ではありません。
※この公演のチケットは、他公演と同時発売ではありません。



2019年11月17日(日)開演 13:30 / 開演 14:00
東松山市民文化センターホール

主催：東松山市民文化センター 東松山2021
協賛：東松山市民文化センター 東松山2021
協賛：東松山市民文化センター 東松山2021
協賛：東松山市民文化センター 東松山2021

はじめて見て、聞き、知る、三味線と笛のいろは！

いざ歌舞伎音楽の世界へ！ ～江戸長唄から現代へ～



三味線と笛のいろはから歌舞伎十八番「船進橋」まで
トークを交えてお届けする歌舞伎音楽の世界をご堪能ください！

東山 悠次 (船橋)

11月17日 三味線演奏のいろはから歌舞伎十八番「船進橋」まで
11月18日 歌舞伎十八番「船進橋」まで
11月19日 歌舞伎十八番「船進橋」まで

新保 有吉 (笛・音)

11月17日 三味線演奏のいろはから歌舞伎十八番「船進橋」まで
11月18日 歌舞伎十八番「船進橋」まで
11月19日 歌舞伎十八番「船進橋」まで

都築 かどれ (鼓三味線)

11月17日 三味線演奏のいろはから歌舞伎十八番「船進橋」まで
11月18日 歌舞伎十八番「船進橋」まで
11月19日 歌舞伎十八番「船進橋」まで

チケットのご案内・お問合せ
東松山市民文化センター
〒250-0294 東松山県松山市 新松山 2-1-1 TEL:0938-82011 FAX:0938-82012

《歌・舞・伎》をいかが？

『公共ホール邦楽活性化事業』のモデル事業として東松山市を担当したのは、長唄三味線（細棹）奏者の簗田弘大さんがリーダーとなり、笛・能管奏者の新保有生さんと長唄三味線奏者の都築かとれさんの3名で編成したチームであった。（以下、敬称は略）

この《簗田チーム》が東松山市を担当することになったのは、東松山市民文化センター副館長の菊地俊孝氏が（一財）地域創造への派遣を受けていた時に、広島県福山市で実施された『邦楽地域活性化事業』において同チームのORとホールプログラムに立ち会われ、『公共ホール邦楽活性化事業』のモデル事業を東松山市で実施するならば「このチームで事業を行いたい」と、《簗田チーム》に白羽の矢を立てたことから始まった。

この《簗田チーム》が持つ「強み」はいくつか挙げられると思うが、まずはORやホール事業の軸に《歌舞伎》音楽を置いたことだろう。

《歌舞伎》は、文化庁の「全国の地芝居（地歌舞伎）調査報告書」（平成27／全日本郷土芸能協会編纂）によれば、全国で218団体も保存活動をしている「郷土芸能」でもあるため、《歌舞伎》というものが身近な存在である市町村も少なくないのではないだろうか。

《簗田チーム》は、この「舞踊・歌・音楽等により総合的に構成」されている《歌舞伎》を、そこで活躍する三味線や笛という楽器を通じて「音楽面」から解きほぐし、《歌舞伎》音楽を通して「日本人が育んで来た感性や表現」を紹介して行くことを意図したプログラムを構成していた。

次いで挙げられる「強み」は、リーダーの簗田が『新潟市ジュニア邦楽合奏団（りゅーとぴあ）』で講師を務めて子ども達と触れ合う経験を豊富に持っていること、そして笛の新保が音楽の教師として教壇に立っていた経験を持つことだろう。これらの経験が、ORで小学生の前に立ち、自らの経験や自分の楽器について語り聴かせる時に大きなバックボーンとなっていた。

さて、東松山市民文化センターでは一般と学校を対象にした4本のORを計画して下さったが、その一般対象のORがホールプログラム（コンサート）のステージでも「一つの形」となり、ORとホールプログラムが有機的に連動した『公共ホール邦楽活性化事業』となった。

ORの幕開けは、東松山市民文化センターの大会議室で東松山市の「茶華道連盟」の方々29名を対象として行い、同日の午後に「箭弓（やきゅう）稲荷神社」の本殿において地元の方々49名を対象に行われた。

「茶華道連盟」でのORでは、ホールプログラムで〈三味線ソロ（簗田）と華道のコラボレーション・パフォーマンス〉を行うこと等も踏まえ、アーティストの3名が華道と茶道のそれぞれの手解きを受ける時間も設けられ、「茶華道連盟」の方々とのコミュニケーションの場を持てるようにして下さったことが、〈三味線と華道のコラボ〉を行うための良い前段プログラムとなった。

一方、「箭弓稲荷神社」は1300年の歴史を持ち、これまで地元の方々が集うコンサート等の行事をあえて行わずに来ていた。今回、初めてコンサートの会場としてご本殿の場を提供して下さったのだが、お社様側でも今回の事業に向けて万全の受け入れ態勢を整えて下さっていた。

特筆したいのは、平素は神職者以外の立ち入りが許されない「幣殿」での演奏を許可して下さい、コンサートが実施できたことである。又、同お社は「七代目 市川團十郎」との縁が深く、「箭弓稲荷神社」で《歌舞伎》を軸に置いたORを実施できたことは3名のアーティストにとっても貴重な経験になった

ことは言うまでも無いだろう。

学校を対象としたORは、東松山市立松山第一小学校の4年生2クラスを対象に実施したが、ここでは彼らが培って来た経験値が物を言ったことはもちろんで、子ども達に語り掛ける彼らの姿勢は「親しみやすいお兄さん・お姉さん」でありながらも、ひとたび彼らが演奏モードに入ると「カッコイイお兄さん・お姉さん」に豹変する姿を、子ども達の手が届く程の距離で感じてもらうことが出来たのは「ORの肝」の一つとなった。

ホールプログラムのコンサートでは、簗田は前半を《歌舞伎》で活躍する三味線と笛の伝統音楽で、後半を三味線と笛の現代作品3曲で構成したが、オープニングに〈三味線と華道のコラボ・パフォーマンス〉を置き、これに「去来」という現代作品を選曲してきた。

「去来」と言う作品は、三味線のみならず色々な邦楽器に数多くの現代作品を書いた作曲家柁屋正邦が独奏三味線ために書いた作品で、文字通り三味線奏者の心に去来するものを三味線の絃に託すためにこの曲名にしたと理解しているが、三味線独奏曲の代表曲として知られている。

簗田と「その時の花と人との一期一会が大事」と語る華道家今井優峰氏が〈コラボ・パフォーマンス〉を行うための作品として、これ以上を望めない選曲であった。

又特筆したいこととして、演奏者と華道家という「人の存在」を極力抑え、「音と花」の「その時その瞬間」に集中させた幕開けを実現するため、ホール技術スタッフの方々が本当に緻密な仕事をして下さったことをはじめとした協力・ご尽力が、ホールプログラムのコンサートを成功裏に導いた非常に大きな力となったことである。

今回の『公共ホール邦楽活性化事業』に向け、関係した各団体との調整に始まり、ORとホールプログラムを実施するためにご尽力下さった東松山市民文化センターの全てのご関係者の方々に心からの感謝と敬意を記して報告としたい。

さて最後に、この報告を最後までお読み下さった市町村ホールのご担当者の中にもお膝元で《歌舞伎》が身近な存在である方々も多くいらっしゃるのではないだろうか？

身近な「郷土芸能」としてある《歌舞伎》を、違った角度から解きほぐして「日本人が育んで来た感性や表現」を見直す一つの切っ掛けとして、《簗田・歌舞伎チーム》のORとホールプログラムをいかがだろうか？



東松山市立松山第一小学校でのアクティビティ

2019年度 公共ホール邦楽活性化モデル事業を振り返って

今回埼玉県東松山市にて実施された、箕田弘大さん、新保有生さん、都築かとれさんチームのサブコーディネーターを担当した。私は米国にて、指揮者として自ら立ち上げたオーケストラの事業の一環として、様々なアウトリーチに多く携わってきたが、日本で、また邦楽のアウトリーチ事業に関わるのは初めての経験だった。

まず年度初めのミーティングの際に、東松山市民文化センターの中山智恵さんから、ホール公演に使われる東松山市民文化センターのホールが1200人収容可能なとても大きなホールである事を伝えられた。集客はどんな公演でも常に悩みの種ではあるが、ホール側が今回のホール公演の集客に対して危機感を持っていることを肌で感じた。現実的な目標として300人の集客を目指すという事と、集客のためになかなりの工夫が必要であるという事を皆で確認した。

次に今回はモデル事業のため、通常の小学校にてのアウトリーチ公演だけではなく、一般対象のアウトリーチ公演が数カ所候補に上がっているという話があった。そこで第一に、一般対象のアウトリーチ公演は、ホール公演の集客に繋げられる可能性のより高い候補先を選考する事と、ホール公演がアウトリーチ公演の一週間後にスケジュールされている事を最大限に利用して、チラシの配布だけでなく、アウトリーチ公演の模様をソーシャルメディア等で宣伝する事を提案した。また第二に、集客のための策として、ホール公演のプログラムに、東松山市在住の他ジャンルアーティストとのコラボレーションや観客参加型のイベントの併催等を取り入れ、プログラムの純粋なコンテンツのみでは興味を持たないかもしれない東松山市民への集客を試みる事を提案した。その結果、市役所のパブリックスペース、近郊大学校舎内等、いくつかあった一般対象のアウトリーチ公演の候補先の中から、市内の箭弓稲荷神社の本殿にて神社の関係者と東松山市のロータリー倶楽部会員に向けてのアウトリーチ公演と、東松山市民文化センターにて東松山市の茶華道連盟の会員に向けてのアウトリーチ公演に決定した。

箭弓稲荷神社は、七代目市川團十郎と縁があり、今回の公演プログラムも「歌舞伎」をテーマにした内容であった事から、うってつけのヴェニューであった。また今回、町の名士の方々にも同席して頂いた。このことは実際の演奏を聴くだけではなく、翌週のホール公演について市民の方々に広く知ってもらうという観点からも、効果を大いに望める選択だったと言える。そして、東松山市茶華道連盟会長・華道家の今井優峰さんに、ホール公演にて華道のパフォーマンスで共演して頂く事が決まった事から、前週に茶華道連盟の方々に実際の演奏を聴いてもらい、翌週のホール公演のコラボレーションについてアイデアを膨らませてもらう機会とした。

アウトリーチ事業からは少し話がそれるが、東松山市の下見の際に、東松山市民文化センターの菊地俊孝さんから、地方へのアウトリーチの事業において、アーティストが東京から来て演奏して帰るだけになってしまう事が多く、地元の方々と交流の場を持つ事が少ない事が残念、とのお話を聞いた。アメリカでは必ずと言っていい程開かれる、アウトリーチ公演以外でのアーティストと観客の交流の機会について全く考えていなかったことに気付かされた。そこで菊地さんの提案により、アウトリーチ公演の後、会長の今井優峰さんをはじめ、東松山市茶華道連盟会員のご指導により、アーティストの三人が実際に華道と茶道の体験を行う機会が設けられた。素晴らしい交流の機会になったことはもちろん、翌週のホール公演にて華道家の今井優峰さんと華道と三味線のコラボレーションをする事になっていた三味線奏者の箕田さんにとっては、実際に華道に挑戦してみる事で、翌週の演奏に向けてインスピレーションが沸いたことと思う。

さて、箕田さんのチームは、前年度に広島県福山市にて地域創造のアウトリーチ事業を既に経験しており、本年度のプログラムも前年度同様、歌舞伎の「勸進帳」を軸にするということで、早い段階から方針が定まっていた。ただ箕田さんは、本年度は一般対象向けのアウトリーチ公演があるため、前年度に創り上げたプログラムを、箭弓稲荷神社と茶華道連盟にてのアウトリーチ公演でもそのまま使うべきかどうかを、悩まされていた。箕田さんには、アウトリーチ公演を翌週のホール公演の集客に繋げたいという意図を説明し、アウトリーチ公演は馴染みの薄い方達にも三味線や笛について知ってもらえるように、よりレクチャー的要素の強いプログラムに大幅に変更し、翌週のホール公演で楽曲の演奏をもっと聴いてもらえるような流れに決まった。結果として、アウトリーチ公演とホール公演の両方で演奏する演目は「勸進帳」のみで、残りは違う曲で構成し、アウトリーチ公演とホール公演の両方に足を運んでくれた観客も飽きずに楽しんでもらえるように、と配慮して頂いた。またアウトリーチ公演とホール公演のプログラムの内容だけでなく、小学生のためのアウトリーチ公演と一般対象のアウトリーチ公演、そしてホール公演において、話し方や説明の内容、プログラムの進め方も、その公演の客層に沿って対応して下さった。

箕田さんのチームの、今回の東松山市での様々な種類の公演と客層への柔軟なプログラム修正能力は特筆すべきものだった。実際に一般対象のアウトリーチ公演の終演後、多くの観客から、「随時説明をしながら楽器や楽曲を紹介してくれたから、とても楽しめました」といった内容のコメントを頂いた。若年層対象に教育的な目的も持って行われるアウトリーチ公演だけではなく、どういった公演でも、馴染みの薄い観客や興味がそこまでない観客に配慮して、演奏に妥協する事はせずに、楽器や曲について説明したり、公演の内容を観客が面白いと感じられる様に奏者側が工夫することは、非常に大切な事である、と私自身も非常に勉強になった。特に箭弓稲荷神社にてのアウトリーチ公演にて、三味線の演奏法の説明を兼ねて「東京音頭」を演奏した際、「知ってる方は一緒に歌ってください」とアナウンスした訳でもないのに、ほとんどの観客が歌詞を知っていて、三味線の演奏に合わせて自然と歌い出したことに感動した。西洋音楽の交響曲には、民謡や当時流行した曲が使われており、演奏される場所によっては観客が演奏に合わせて口ずさむ事が今でも時にあるが、改めて「地域に根付いたものが芸術」という私の信念を思い起こされた瞬間だった。またホール公演においても、ミニマルな舞台セットの中、三味線奏者の箕田さんが三味線のための独奏曲「去来」を演奏する横で、華道家の今井さんがステージ上で花を活けるパフォーマンスを行い幕開けした。演奏終了と同時にステージには素晴らしい活け花の作品が出来あがった。前週の茶華道連盟との交流会の際に「音楽の演奏と同じ様に、その花はその時にしかないもの」と今井さんが言われていたが、まさに今回の東松山市でしか創り出せなかったパフォーマンスが生まれたことに感動した。

プログラム前半の残りは、歌舞伎音楽における三味線と笛の役割を説明しながらの演目だったが、冒頭の活け花とのコラボレーションの後、箕田さんの「いざ、歌舞伎音楽の世界へ」の掛け声と同時に、舞台に松羽目が現れる演出がなされた。これは下見の際にコーディネーターの米澤浩さんが、ホールに立派な松羽目が備え付けられている事に気づいた事から生まれたアイデアで、効果抜群だった。プログラム後半は技術的にも音楽的にも非常に難解な三味線と笛の現代作品3曲を見事に演奏され、全体を通して観客にとって非常に満足できる内容だったのではないかと思う。

私は普段指揮者として、作曲家と演奏家、そして演奏家と観客の間に入り、音楽をどう伝えれば心を動かす事ができるか、を考えているが、今回サブコーディネーターとして、東松山市民文化センター職

員の皆様、地域創造の皆様、演奏家の皆様、そして観客との間に入る役割を担えた事は、私にとって非常に有益な経験になった。スケジュール等のロジスティックスから、公演のプログラムについてアドヴァイジングしたり、ホール公演ではステージマネジャーをしたりと、アウトリーチ事業の様々な面に携わる事ができ、その過程で邦楽の世界ではある意味「外部の人間」と言える私は、間に入りやすい存在だったため、できる限り周囲の話を聞き、橋渡しをする役に徹するよう努めた。

ホール公演の日の朝食にて、箭弓稲荷神社のアウトリーチ公演での観客による「東京音頭」の合唱にとっても感動した事を、箕田さんにお話ししたところ、ホール公演直前に箕田さんから当初は予定していなかったアンコールをやりたいとの要望をいただいた。そしてホール公演においても、328名の観客による「東京音頭」大合唱で終演した。

サブコーディネーターに求められている責務をしっかりと果たせたのかどうかは分からないが、少なからずアーティストの皆様や東松山市の皆様のお役に立てていたら、嬉しく思う。

実施団体：釜石まちづくり株式会社（釜石市民ホール）

実施時期：令和2年3月5日（木）～令和2年3月7日（土）

出演アーティスト：岡村 慎太郎（三味線・十七弦） 山形 光（箏） 黒田 鈴尊（尺八）

※新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、事業実施直前に中止となったが、予定していた内容と、経緯などについて、報告書としてまとめる。

アクティビティ

タイトル：やさしい《邦楽》コンサート in あいぜんの里

期 日：令和2年3月5日（木） 10：00～11：00

会 場：特別養護老人ホームあいぜんの里 ホール

参加者：入所者および職員（50名）

入所者の皆さんが若かりし頃触れていた邦楽を楽しんで頂きたいとの目的で実施。以前長唄三味線の訪問コンサートを実施したことがあり、施設長さんはかつての釜石の邦楽文化がとても盛んだったことを誇りに思っていることから、訪問先に選定。演奏者のトークを交えながら、気軽に楽しめるコンサート内容とする予定だった。

タイトル：やさしい《邦楽》コンサート in 只越復興住宅1号棟

期 日：令和2年3月5日（木） 14：00～15：00

会 場：只越復興住宅1号棟 集会室

参加者：復興住宅入居者（20名） 対象世帯数約30戸

復興住宅入居者のコミュニティ維持・形成の一助となることを目的に実施。ホールから徒歩圏内。訪問先選定にあたっては、市社会福祉協議会のコミュニティ担当さんよりアドバイスを受けて、コミュニティ代表者（地区長のような方）に相談して決定。演奏家のトークを交えながらのミニコンサートのほか、コンサート後に少しでも交流時間を設け、演奏家、入居者同士のコミュニケーションの場となることをに努めた。

タイトル：やさしい《邦楽》コンサート in 中妻公民館

期 日：令和2年3月6日（金） 10：30～11：30

会 場：中妻地区生活応援センター（中妻公民館） 集会室

参加者：近隣復興住宅入居者（30名） 対象世帯数約200戸

目的や訪問先選定については只越1号棟と同様。生活応援センターは、地区公民館と市役所支所（諸受付窓口）機能を併せ持った施設。対象世帯数としては市内でもかなり多い方。平日でも条件が良ければ50人近くが来場して下さるため、実施目的に最も適した施設でした。午後の訪問先も控えているため、入居者との交流時間は設けず。

タイトル やさしい《邦楽》コンサート in 天神復興住宅

期 日 令和2年3月6日（金） 14：00～15：00

会 場 天神復興住宅 集会室

参加者：復興住宅入居者および隣接保育園年長（30名）

対象世帯数約60戸

目的や訪問先選定については只越1号棟と同様。地元の長唄三味線の先生が入居していること、他の復興住宅と比べてもコミュニティ活動が盛んなことも訪問先選定理由の一つだった。隣接する保育園児も対象としたのは、集会室でイベントがある際は度々園児を招いていた為、長唄三味線の先生からの要望を受け入れる形で対象としました。只越復興住宅1号棟と同様に、コンサート終了後に入居者との交流時間を設けた。

コンサート

タイトル：箏・三味線・尺八が織りなす“和”の情景 ～やさしい《邦楽》コンサート～

期 日：令和2年3月7日（土） 13：30～15：15

会 場：釜石市民ホールTETTO ホールB

参加者：主に一般 年齢による入場制限なし／未就学児無料

ホールに足を運んでいただく機会を提供する目的で、令和元年度に気軽に楽しめるコンサートシリーズの一つとして実施。さらに邦楽の入門編として実施したいと考え、サブタイトルを“やさしい《邦楽》コンサート”とした。演奏プログラムは、定番の「春の海」から始まり、各楽器の個性を生かした楽曲を3曲、最後に三曲合奏「尾上の松」。現代の曲も織り交ぜつつ、楽しめる内容。公演後には各楽器の体験コーナーを設けた。

① 応募の動機・事業のねらい

製鉄所で景気が良かったころの釜石市では邦楽が盛んに行われていましたが、鉱山が閉まり市の人口減少と共にその文化を受け継ぐ人材が少なくなってきたおり、市民ホールとして伝統継承・次世代育成に取り組むたいと考え、そのノウハウを学びたいと考え事業に応募しました。事業の狙いとしては、上記のとおり伝統継承・次世代育成のために事業を行う予定でしたが、後段④の理由によって途中からコミュニティ維持形成の目的も組み込みました。

② 企画のポイント

- ・主に子供たちに邦楽の楽しさ（カッコ良さ）を伝えられる
 - ・楽器に触れられる機会を提供する
 - ・気軽に参加できる雰囲気にしてホールに足を運んでいただくキッカケを提供する
- 加えて後付けになりましたが、
- ・復興住宅コミュニティの維持形成

③ 企画実現にあたり苦労（問題となった）した点

- ・子供たちへのアプローチ

当初アウトリーチ先は小・中学校に訪問する予定でしたが、各学校で独自に他のアウトリーチや芸術鑑賞事業を受け入れていてスケジュール的に余裕が無く、受け入れ先が調整できませんでした。また、事業内容が固まってからのタイミングでは学校としては遅かったため、仮でも良いので年度明け前に情報提供だけでも実施しておけば良かったと思います。

④ 上記③をどのようにクリアしたか

アウトリーチ先に学校を選定できず、根本的にはクリアできたとは言えませんが、チラシデザインは子供でも来ても良いような雰囲気となるように努め、保護者の気を引く取り組みとして楽器体験コーナーを設けました。復興住宅のコミュニティ状況がどのような状況にあるか、思わしくない状況にあるならホール事業でその手助けはできないかと考えていたため、代替りのアウトリーチ先は復興住宅コミュニティ施設を中心に選定しました。

⑤ 事業を実施しての成果

新型コロナウイルス感染拡大予防の影響で、アウトリーチ、コンサートとも中止となったため、演奏を提供しての成果を語ることはできませんが、準備を進めていく中で、地域の邦楽演奏家・先生と繋がりを形成したり深めることができ、邦楽事業を行う上でのサポーターが地域に居ることを知りました。また地域コミュニティ問題に取り組むキーパーソンとも関係性を深めることができました。

⑥ 事業を実施しての反省点・課題

学校への情報提供が遅れてしまい、小中学校でのアウトリーチが実施できなかったこと。その前段には、教育委員会や学校との繋がりを構築できていなかったことも課題として挙げられます。また、病院や老人ホームを対象としたアウトリーチを実施する際にも、2・3月はインフルエンザ流行期にあたる

ため断られるケースが多く、実施時期も見直した方が良いと感じられました。

また、制作を進めていく過程で、邦楽の楽器について知識が不足しているとも感じられました。

⑦ 今回の事業を通じて、自身の「町」または「ホール」について改めて考えたこと

アウトリーチ訪問先の相談で社会福祉協議会のコミュニティ担当者と相談する中で「震災被災者は、津波被災→避難所解散→仮設住宅閉鎖で3回目のコミュニティ崩壊の危機に瀕している。どんな形でも良いので集える機会は1回でも多い方が良い。」と教えられました。釜石市が抱える大きな問題の一つと思われます。多くの被災者は高齢者で、どんなに近くてもホールに足を運ぶことが億劫に感じる人も多いようです。ホール側が出向いて文化芸術を提供することを通じ、各復興住宅のコミュニティを助けることが、当ホールの重要なミッションではないかと感じました。

令和元年度公共ホール邦楽活性化モデル事業～未完に終わったプログラム

2つ目の実施地は、近代製鉄業発祥の地として知られる岩手県釜石市。街のあちこちに、今なお東日本大震災の痕跡が残る。2018年にオープンしたばかりの釜石市民ホール（TETTO）でのコンサートを軸に、市内4か所でアウトリーチを実施する予定で準備を進めていたところ、コロナウイルス感染拡大防止の影響から直前になって中止が決まった。

環境さえ整えば、いつでもすぐに実現できる。いつか再チャレンジできる日が来ることを願って、以下にプログラムの概要について記しておきたい。

■気心の知れた仲間たちが再結集

地歌箏曲家の岡村さんと山形さん（いずれも生田流。宮城会所属）に、琴古流尺八家の黒田さんが加わったチームは、平成25（2013）年度「邦楽地域活性化事業」を機に結成された。恒常的に活動しているわけではないが、3人とも東京芸術大学の同窓生で気心の知れた仲間たちだ。

ことに岡村さんは古典に心を寄せ、大阪菊筋の箏と三弦（地歌での三味線の呼称）の組歌伝授も受けている。黒田さんは現代曲にも意欲的に取り組み、国際的に活躍している。

6年の時を経てパワーアップした彼らは、手の内にある曲なら、特別な合奏練習はさほど必要としない。臨機応変にプログラムを組み立てられる。その一方で、チームとしての活動を示す写真やインタビュー対応など、既存の素材が少なく、広報スケジュールに支障を来すこともあった。

■なかなか決まらなかったアウトリーチ先

当初考えていた学校でのアウトリーチが不調に終わった後、浮上してきたのが復興住宅だった。もとより本事業のねらいの一つは、場所や性別・年齢等に関係なく、より多くの人に邦楽の魅力を伝える術を探り、機会を増やすことにある。初のケースとして、新たな可能性が期待できる。

アーティストの関心も高く、11月下旬に至って、特別養護老人ホームと3つの復興住宅での実施が決まった。社会福祉協議会担当者の助言を得て、平日の日中で、在宅している高齢者が一定程度参加する目算が高いところを選んだという。下見は1月中旬になった。

なお、学校での受け入れが不首尾に終わった背景には、3月上旬という時期が関係していたように思う。通常でも行事が多いシーズンである。とくに2019年度はラグビーワールドカップの開催地だった釜石の子どもたちは、例年以上にいろいろな役割を担っていたことは想像に難くない。早い時期に学校以外への方向転換を提案すべきだったのではないかと悔やまれる。

■学校とは異なる環境でのアウトリーチ

チームとしては、2013年度に徳島県内の小中学校での経験がある。しかし今回は、被災地で、高齢者が対象である。しかも、3月11日を間近に控えた時期。私もアーティストも経験がなく、不安な気持ちを抱いていた。

老人ホームでの時間的制約は、昼食の準備、デイサービスの方の来所や帰宅時間等、時として学校よりも厳しい。復興住宅にも日々の暮らしの時間割があり、集会室もこじんまりとしたものから、公民館機能を持つところもある。それぞれの場所と状況に即した柔軟なプログラムが必要となる。釜石の高齢者層は製鉄の街として隆盛を誇っていた頃、多様な文化を享受していた方々と伺った。アーティストの

人間力と演奏力が問われる場となりそうだ。

プログラムはトークを含めて45分程度。アーティストの実力を発揮できる作品を軸に親しみやすい曲を組み合わせ、参加者と一緒に歌をうたったりするシーンを含める構成とした。運搬・移動・設営に要する時間を考え、使用する楽器は最小限に留める一方で、復興住宅では必ず交流の時間を設けることにした。アーティストが出向く意義が際立つポイントの一つだ。ホール担当者の中村さんのご提案によるが、社会福祉協議会の方からいただいた「時が経ち、話せなかったことを誰かに話す機会が大切」というアドバイスも、私たちの背中を押してくれた。

■コンサート・プログラムについて

「箏・三味線・尺八が織りなす“和”の情景～やさしい《邦楽》コンサート～」と題し、TETTOで毎月のように開催されている低価格コンサート「ウィズ・ミュージズシリーズ」の第10回として行うことになった。演奏者のトーク付きで、テクニックを目の当たりにし、音に浸れることが好評だという。一定程度の集客が見込め、広報等もホールの年間スケジュールに即して進められるメリットが大きい。

「楽器や編成を生かした専門的な楽曲を交えつつ、少し知っている曲があると良いのでは…」という中村さんのリクエストをもとに、前半に「春の海」(箏・尺八二重奏)「荒れ鼠」(三弦の弾き歌い)「瀬音」(箏・十七弦二重奏)、休憩をはさんで後半に「奥州薩慈」(尺八古典本曲)「尾上の松」(三曲合奏)を並べた。東北を意識しつつ、このチームらしい個性が発揮できる内容になったと思う。

ところで邦楽プログラムでは、楽器の種類と数、運搬がいつも課題となる。手持ちの三弦と尺八は別として、箏と十七弦は輸送手段が悩ましい。現地の楽器店情報などを調べた結果、仙台市内の楽器店から借用することで決着。演奏会当日も協力いただけることになって環境が整った。

■コンサートに楽器体験を添える

演奏会後に20～30分程度の楽器体験を行うアイデアも盛り込まれた。馴染みが薄い邦楽領域では、こうした「ついで」体験の取り組みは少なくない。ここでもまた、楽器はどうするかが悩みの種。中村さんの丁寧な交渉によって、三味線と尺八、箏をそれぞれ地域の演奏家から借用できる目処がつき、体験には提供者の方々の協力を得る心積りで準備を進めた。一連の流れを通して、アーティスト同士の交流の機会に加え、ホールと地域の演奏家との将来に向けた良い関係づくりに期待がふくらむ。

■何度も練り直しされた広報計画

ホール主催のコンサートシリーズに位置づけられたことから、通常広報スケジュールに沿って情報を発信できる環境が整っていた。8月には広報媒体の種類と必要な素材、おおよその進行計画を提示いただいていた。

「ウィズ・ミュージズシリーズ」では2回分の情報を1枚にまとめたチラシが標準形。ほかに単独チラシを作成。WEBと連動したフリーペーパーでアーティスト・インタビューや動画メッセージを発信。12月初旬のチケット発売以降は随時Facebookも活用。市報・新聞等への記事掲載のほか、アウトリーチ用には簡易なチラシを手作りする計画だった。

ところがアーティスト以下、関係者のスケジュールが折り合わず、タイミング良く素材を提供できないことが相次ぎ、何度も計画の練り直しをすることになった。

関係者間のやりとりは主にメールで行った。サブコーディネーターの丹羽さんに窓口を一本化し、全員が情報共有するように心がけたが、タイムラグが生じたり、意を尽くせないことも少なくなかったように見受けている。なかなか骨の折れる作業だったことは確かだ。早い時期に最適なコミュニケーションツールの活用を検討すべきだったと反省しきりだが、それ以前に、誰もが忙しい秋のシーズンよりも前に必要な素材をとりまとめるべきだったことはいうまでもない。

忙しい仕事の隙を縫って、誠実にご対応くださった中村さんと、粘り強く取りまとめてくださった丹羽さんの細やかな心遣いに改めて感謝したい。

■不運が重なった釜石での邦楽プログラム

今回のプログラムでは、誰も予想していなかったコロナウイルスの感染拡大防止に伴う活動自粛という事態のほかにも、いくつかの不運が重なった。

釜石市がラグビーワールドカップの開催都市の一つだったことから、ホールにはファンゾーンが開設されていた。TETTO関係者の方々にはかなり不規則な対応を迫られる年だったのではなかろうか。アウトリーチ先がなかなか決まらず、下見時期が遅れ、プログラムの検討が進められない連鎖の遠因だったように感じる。秋には台風19号の影響による大きな被害もあり、ラグビーの試合そのものが中止になっている。

一方のアーティストたちも6年前に比べ、それぞれに活動領域を広げ、厳しいスケジュールに身を置いていた。さまざまな面で調整に苦労したことも確かだ。ホール担当者とのメールのやりとりは深更に及ぶことが少なくなく、大きな負担をおかけしたに相違ない。しかも、メールだけでのやりとりには限界があり、相互の情報共有、状況把握が十分でなかったように感じる。

ホール担当者には、個性的な空間であるコンサート会場の可能性を探りたいという思いもあったと伺った。アーティストが現場に入って確認すべき要素が大きく、応えられなかったことも心残りの一つである。

このように反省材料には事欠かない。事業が実施できていれば、さほど問題にはならない事柄かもしれない。未完に終わっただけに、払拭することが難しい。コーディネーターは何をすべきなのか。未だ自問する日々が続く。

公演中止で見えてきた事前準備の大切さ

釜石市での邦楽活性化モデル事業は、新型コロナウイルスの感染拡大により中止となった。中止の決定は実施開始日の6日前だったため、実施に関わる事前の準備はほぼ完了し、あとはアウトリーチとコンサートを実施するだけという状態だった。

事業が中止になり、色々なことを考えた。感染防止対策を徹底した上で実施する方法はなかっただろうか、やり方や場所を変えて実施することはできなかったかなど、実施するための方法を頭の中でイメージしてみた。しかし、高齢者が多く集まる場所でのアウトリーチを予定していたため、どのような対策をとったとしても、やはり実施は難しかったと思う。

5月の全体研修会から始まり10ヶ月近く、釜石市民ホールTETTOの中村さんと打ち合わせや細々した調整を進め、ようやく実施目前！というところでの中止決定は、今までの準備が水の泡になってしまったようで、本当に残念で仕方がないが、私自身、今回の件で事前準備の大切さを実感することができた。事前準備を丁寧に行っておくことは、たとえアウトリーチやコンサートが実施できなくなったとしても、今後のホール運営や地域の人々との関係づくりにおいて、とても重要な役割を果たすと思う。

担当の中村さんは、地域の人々の意見に積極的に耳を傾け、今回の事業に反映させようと努力されていたのが印象的だった。地域の人々の意見を取り入れてホール運営を行っていくことはとても大切けれども、様々な立場や意見があるので大変なことだと思う。下見で釜石市に伺った時、地域の人々と真摯に向き合いながらアウトリーチ先との準備を進めていることが、ホール職員の皆さんと地域の人々とのやりとりを見て感じられた。

今回のアウトリーチ先は、老人ホーム1カ所と、復興支援住宅3カ所を予定していた。老人ホームでの実施に関しては、以前からホール主催のアウトリーチを行っているため、今回も実施をしたいとのことであった。しかし、3月の寒い時期なのでインフルエンザが流行した場合は、実施できないという条件付きであった。老人ホームで実施できない場合には、鶴住居という地区にある生活応援センター（公民館のような施設）で、施設利用者向けに実施するという事になった。残り3カ所の復興支援住宅というのは、東日本大震災後の復興支援として建てられた住居である。仮設ではなく、住み続けることができる集合住宅で、外観はマンションのようであるが、施設内に住民が集うことができる集会場があるのが特徴である。アウトリーチは、復興支援住宅内にある集会場で実施する予定だった。

下見でアウトリーチ先を訪問した際、課題が2点上がった。1つ目はスケジュールである。老人ホームでは、薬の服用時間などと重ならないようにアウトリーチを実施する必要があり、実施できる時間が限定されていた。また、市内に点在する3カ所の復興支援住宅への移動時間も考えなければならないため、どのようなスケジュールがよいのか悩んだ。学校の教室であれば、どこの学校でも大体同じようなつくりなので、一度楽器の配置を決めてしまえば、他の学校でも同じような配置で実施できることが多いのだが、今回は全てのアウトリーチ会場の大きさやつくりが異なっていたため、各場所で楽器配置を考える必要があった。学校ではない4カ所の異なる場所でのアウトリーチを行う場合、1カ所のアウトリーチで、〈楽器搬入→楽器配置→音出し（問題があれば配置変更）→リハーサル→アウトリーチ本番〉という一連の流れを行うことを考えると、スケジュールの工夫が少し必要だと思った。2つ目の課題は集客である。今回のアウトリーチは、3カ所が復興住宅内の集会場であり、住民が対象だったため、宣伝をして集客しなければならなかった。そこで、アウトリーチ用のチラシを作成し、復興住宅の全戸に

配布することにした。

2つの課題に対し、スケジュールについては、できる限りアウトリーチ先での滞在時間を取れるように計画し、集客については全戸にチラシ配布を実施するということにしていたが、実際のところこの方法で上手くいったかは分からない。

公演では、来場者が楽器に触れる機会を作りたいという案が出た。そこで公演終了後に、楽器体験コーナーを設置することにした。体験に使用する楽器は、地元の演奏家に声をかけるなどしてホールで手配することになった。

公共ホールが主体となってアウトリーチを実施する際に、地域のキーパーソンを見つけることがポイントであると言われる。邦楽の場合、その地域の伝統芸能に関わる人や団体から、キーパーソンを見つけやすいのではないかと思う。釜石市では、楽器体験コーナーで使用する楽器手配のために、地元の演奏家を探した。中村さんのご尽力のおかげで、体験用の箏、三味線、尺八を地元の演奏家からお借りし、本番当日の体験コーナーのお手伝いもしていただけることになった。残念ながら、実施することはできなかったが、協力してくだる予定だった地元の演奏家の皆さんは、今後ホール主催で邦楽の事業を実施する際、キーパーソンになるのではないかと思う。

今回のように、演奏者が関東からやってきて公演やアウトリーチを行う場合、地元の演奏者の協力があれば、体験楽器コーナーを設置したり、公演後、邦楽に興味をもったお客さんが、地元の演奏者に演奏を習ったりという展開も期待できる。また、ホールが仲介することで、お互いに関わりの少ない地域の伝統芸能同士を結びつけ、地元の演奏者の新たなネットワーク形成につなげることができるかもしれない。

担当の中村さんは、事前準備において、アウトリーチ先や体験楽器を借りられる人を探したりする際に、地域の人々の様々な意見を聞き、うまく事業に反映させることができないかと試行錯誤されていた。今回は残念ながら事業を実施することはできなかったが、今後のホール主催事業では、地元の人々の意見やアイデアを取り入れた、釜石市民ホールTETTOならではのユニークな事業がたくさん生まれることを楽しみにしている。

Ⅲ. 令和2年度公共ホール 邦楽活性化モデル事業の概要

令和2年度公共ホール邦楽活性化モデル事業実施体制

◎主催団体：埼玉県秩父市

- 一般財団法人上里町文化振興協会（埼玉県上里町）
- 公益財団法人高松市文化芸術財団（香川県高松市）
- 一般財団法人熊本市社会教育振興事業団（熊本県熊本市）

◎共催団体：一般財団法人地域創造

◎主催団体担当者

- 松村 剛雄、高井 真明（秩父市市民部秩父宮記念市民会館）
- 高橋 達也（一般財団法人上里町文化振興協会 管理兼業務係）
- 橋本 良治、堀 有紀子（公益財団法人高松市文化芸術財団）
- 光永 綾音、吉田 愛（熊本市市民会館）

◎チーフコーディネーター〔地域創造の派遣する専門家〕

- 児玉 真（一般財団法人地域創造プロデューサー）

◎コーディネーター〔地域創造の派遣する専門家〕

- 伊藤 由貴子（公益財団法人神奈川芸術文化財団 事務局次長）…高松市担当
- 谷垣内 和子（公益社団法人日本芸能実演家団体協議会 実演芸術振興部 企画室長）…上里町担当
- 米澤 浩（邦楽演奏家、NPO法人日本音楽集団 副代表）…秩父市、熊本市担当

◎サブコーディネーター〔地域創造の派遣する専門家〕

- 大久保真利子（九州大学総合研究博物館専門研究員、相愛大学伝統芸能コーディネーター育成プログラム特別研究員）…秩父市担当
- 田中 元樹（指揮者）…高松市担当
- 丹羽 梓（横浜国立大学大学院博士後期課程）…上里町、熊本市担当

◎演奏家

- 木場 大輔（胡弓・作曲）、伊藤 麻衣子（箏）、島村 聖香（邦楽打楽器）…秩父市担当
- 藤高 理恵子（筑前琵琶）、石田 真奈美（箏）、簗田 弘大（三味線）…上里町担当
- 吉澤 延隆（箏）、川村 葵山（尺八）…高松市担当
- 佐藤 亜美（箏）、佐藤 将山（尺八）…熊本市担当

■事業実施日程

◎研修

実施内容	実施日	会場
全体研修会	6月12日：ウェブ講義／7月31日：演奏家プレゼン、グループミーティング	地域創造会議室、ウェブ

◎市町村公演

実施団体	担当演奏家等	内容	実施日	学校、ホール名
秩父市	木場 大輔 ＜コーディネーター＞ 米澤 浩 ＜サブコーディネーター＞ 大久保 真利子	アウトリーチ①	2月9日（火）	
		アウトリーチ②	2月9日（火）	
		アウトリーチ③	2月10日（水）	
		アウトリーチ④	2月10日（水）	
		コンサート	2月11日（木祝）	秩父宮記念市民会館大ホールフォレスト

上里町	藤高 理恵子 <コーディネーター> 谷垣内 和子 <サブコーディネーター> 丹羽 梓	アウトリーチ①	1月21日(木)	
		アウトリーチ②	1月21日(木)	
		アウトリーチ③	1月22日(金)	
		アウトリーチ④	1月22日(金)	
		ワークショップ	1月23日(土)	上里町総合文化センター(ワーブ上里)
高松市	吉澤 延隆 <コーディネーター> 伊藤 由貴子 <サブコーディネーター> 田中 元樹	アウトリーチ①	11月20日(金)	
		アウトリーチ②	11月20日(金)	
		アウトリーチ③	11月21日(土)	
		アウトリーチ④	11月21日(土)	
		コンサート	11月22日(日)	サンポートホール高松第1小ホール
熊本市	佐藤 亜美 <コーディネーター> 米澤 浩 <サブコーディネーター> 丹羽 梓	アウトリーチ①	11月12日(木)	
		アウトリーチ②	11月12日(木)	
		アウトリーチ③	11月13日(金)	
		アウトリーチ④	11月13日(金)	
		コンサート	11月14日(土)	市民会館シアーズホーム夢ホール大会議室

※上里町は新型コロナウイルス感染症拡大防止のため本番中止。

演奏家プロフィール

◎：代表者

【埼玉県秩父市担当】

◎^{きば だいすけ}木場 大輔 胡弓・作曲

淡路島出身。甲陽音楽学院にて音楽理論とピアノを学ぶ。名古屋系古典胡弓を原一男師に師事。一方で京都・大阪・東京の古典胡弓および文楽、風の盆、尾張万歳など日本各地で伝わる胡弓の奏法を研究。それらを組合せた演奏法の開発や、低音域を拡張した四絃胡弓の開発、作曲など、胡弓の伝統に新たな光を当てている。NHK Eテレ「にっぽんの芸能 花鳥風月堂」「新春眼福!花盛り」などに出演のほか、NHKワールド「Blends」での演奏が全世界に繰り返し放送される。吉田兄弟全国ツアーや、映画「駆込み女と駆出し男」サントラ、楽曲提供など、幅広く活動を展開。胡弓重奏プロジェクト「弓連者」主宰。「絹擦会」を東京・横浜・大阪にて主宰。

◎^{いとう まいこ}伊藤 麻衣子 箏・二十五絃箏

NHK 邦楽技能者育成会第50期修了。NHK 邦楽オーディション合格。NHK-FM「邦楽のひととき」に出演。松坂慶子主演朗読劇「額田王と吉野」、徹子の部屋コンサート東京・大阪両公演、VOGUE社主催「阪急ファッションナイトアウト」に出演するなど様々な舞台に出演。胡弓と箏によるデュオユニット「生糸」を結成し、NHK WORLD「Blends」に出演し全世界で放映された他、世界遺産二条城での和楽器サミット2018 や、2019年元日放送のNHK Eテレ「新春 眼福!花盛り」に出演。CD「キイトピラ」をリリース(2018)。桜井市音楽協会理事。日本音楽集団団員。

◎^{しまむら せい か}島村 聖香 邦楽打楽器

広島県出身。邦楽囃子を望月彦十郎師に師事。望月彦聖として古典活動を行う。東京藝術大学音楽学部邦楽科卒業。同大学大学院音楽研究科修了。在学中、宮中桃華楽堂に於て御前演奏。2017年まで同大学非常勤講師。サントリーホール主催デビューコンサート・新派公演・板東玉三郎「日本橋」公演・片岡愛之助シスターナ歌舞伎・松尾スズキ舞台・NHK 大河「麒麟がくる」などに囃子方として出演するなど日本国内公演多数。中国、スペイン、ボリビアにて海外公演。古典から現代曲まで幅広く演奏活動する傍ら、学校公演、ワークショップなど 邦楽器や伝統音楽の魅力を伝える事にも力を入れている。「聖和会」主宰。音緒乃会所属。邦楽囃子研究所歳松会会員。日本音楽集団団員。

【埼玉県上里町担当】

◎^{ふじたか りえこ}藤高 理恵子 筑前琵琶

神奈川県逗子市出身。筑前琵琶演奏家。第5回東京・邦楽コンクールにて日本現代音楽協会賞受賞。第15回くまもと全国邦楽コンクールにて優秀賞受賞。NHK 邦楽オーディション合格。国立劇場主催の現代邦楽公演やNHK-FM、Eテレの邦楽番組に出演。古典弾き語りや現代邦楽の演奏活動を行うと共に、現代語によるオリジナル作品の創作にも力を注いでいる。小さな会場でのソロライブ、学校公演、他楽器とのアンサンブル演奏など幅広く活動。また芝居や無声映画の伴奏、書道・茶道・生け花など他のジャンルとのコラボレーションも行う。日本音楽集団の団員として国内各地および海外での公演に参加。都内にて琵琶教室主催。

◎^{みのだ こうだい}蓑田 弘大 長唄三味線

東京生まれ。長唄三味線演奏家。幼少より尚美学園子供音楽科にて、ピアノ、ソルフェージュを習う。2006年東京藝術大学(長唄三味線専攻)卒業。第26回市川市文化振興財団新人演奏家コンクール最優秀賞、第3回K邦楽コンクール古典部門(大学・一般の部)1位優秀賞を受賞。TVドラマ「タイガー&ドラゴン」、周防正行監督作品「舞妓はレディ」等の音楽制作をはじめ、煌★バンドCD「和楽器DE MUSIC FOUNTAIN」の収録にも参加。日本音楽集団、和楽団 煌、長唄東音会所属。昭和音楽大学非常勤講師、新潟市ジュニア邦楽合奏団講師など、東京を中心に新潟、仙台にて指導している。海外公演も多く、古典から現代、作曲活動から音楽教育まで、国内外で幅広く活動している。

◎^{いしだ まなみ}石田 真奈美 生田流箏曲

千葉県柏市出身。生田流箏曲・三絃演奏家。幼少より祖母石田敏子に箏の手ほどきを受ける。のちに、箏・三絃を深海さとみに師事。2006年東京藝術大学(生田流箏曲専攻)卒業。卒業時にアカンサス音楽賞を受賞。桃華楽堂にて御前演奏をつとめる。第16回くまもと全国邦楽コンクールにて優秀賞、第20回賢順記念くまもと全国箏曲コンクールにて銅賞を受賞。2014年、2018年にソリストとして千葉交響楽団と共演。他、演奏会出演多数。NHK WORLD「Blends」、NHKテレビ・ラジオ出演。和楽器オーケストラあいおい、和楽団 煌メンバー。古典、現代曲、ポップス等のジャンルを問わず、箏や三絃の魅力で琴線に触れる音楽を届けたいと日々活動している。

【香川県高松市担当】

◎^{よしざわ のぶたか}吉澤 延隆 生田流箏曲

1982年栃木県宇都宮市生まれ。7歳より、和久文子のもとで箏を始める。2006年平成18年度文化庁新進芸術家国内研修制度研修員として、箏、十七絃箏を菊地悌子、沢井一恵、福永千恵子、地歌三絃を芦垣美穂、アナリーゼを作曲家・嶋津武仁のもとで学ぶ。07年東海大学大学院芸術学研究科音響芸術専攻修了。08年第15回賢順記念全国箏曲コンクールにおいて第1位・賢順賞を受賞。09年宇都宮市より「うつのみや市民賞」を受賞。11年活躍が期待される芸術家に贈られる第10回「宇都宮エスパー賞」を宇都宮市より受賞。16年栃木県「とちぎ未来大使」に就任。現在、東海大学教養学部芸術学科非常勤講師。東京文化会館ワークショップ・リーダー。

◎^{かわむら きざん}川村 葵山 尺八

東京都出身。東洋大学、NHK 邦楽技能者育成会卒。尺八を父、川村泰山に師事。第15回くまもと全国邦楽コンクール最優秀賞、第36回、第38回都山流全国本曲コンクール金賞受賞。現在、都山流大師範、講師補、検定員補。都山流尺八楽会、泰山会、和の

オーケストラ「むつのを」、「The Shakuhachi 5」、尺八四重奏団「破竹」等に所属。東京を中心に演奏活動の他、学校公演やカルチャースクール、子供のためのリトミック教室、YouTubeに演奏動画を投稿する等、尺八を一般に広めるべく活動中。東京都練馬区、長野県伊那市にて尺八教室を開き、指導も行う。

【熊本県熊本市担当】

◎佐藤 亜美 生田流箏曲

桐朋学園芸術短期大学卒業。同、専攻科卒業、研究生修了。第13回賢順記念全国箏曲祭、賢順賞受賞。第17回くまもと全国邦楽コンクール、最優秀賞・文部科学大臣奨励賞受賞はじめ受賞多数。NHK教育テレビ「芸能花舞台」、Eテレ「にっぽんの芸能」、「民謡魂」、出演。ドイツ、韓国、ブラジル、フランス等の、海外公演出演。演奏活動の他、舞踊、歌舞伎、現代能等、舞台音楽の手付・作曲・録音、様々な楽曲アレンジ等、幅広く音楽活動を展開。

○佐藤 将山 尺八

東京藝術大学及同大学大学院修士課程音楽研究科邦楽専攻修了。(公財)都山流尺八楽会准師範及師範首席登第。韓国、シンガポール、台湾等海外公演出演、オーケストラ、シャンソン、舞踊、朗読劇等ジャンルを超えた共演、学校公演も多数行う等、尺八の普及と発展を目指し勢力的に活動している。現在、公益財団法人都山流尺八楽会宮城県支部、(公社)宮城県芸術協会会員、一般社団法人「伝統芸能国際化協会」在籍。

令和2年度公共ホール邦楽活性化モデル事業 全体研修会実施概要

- 1 概要 当初は5月に関係者が地域創造会議室に集まり実施予定だったが、新型コロナウイルス感染症に伴う緊急事態宣言の発出により、延期を決定した。その後、まずは6月12日に座学を中心としたプログラムを実施。グループミーティング等のプログラムについては、実施団体と演奏家が直接コミュニケーションを取ることができる限られた場のため、新型コロナウイルス感染症の状況が許すのであれば7月中に行う計画を立てた。しかし、7月に入り都内での感染者数が3桁の日が続き、警戒レベルが引き上げられたことにより、7月31日に、一部の関係者を除いてリモート形式で残りのプログラムを実施した。
- 以下、6月12日のプログラムを①、7月31日のプログラムを②として情報を記載する。
- 2 参加者 ①令和2年度実施団体担当者、コーディネーター等
②令和2年度実施団体担当者、コーディネーター等、令和2年度派遣演奏家（任意）
- 3 日程 ①令和2年6月12日（金） ②令和2年7月31日（火）
- 4 会場 ①Zoomを使用してのリモート参加
②一部の関係者のみ地域創造会議室／Zoomを使用してのリモート参加

5 全体研修会スケジュール

①

月日	時間		内容
6月12日	14:00 ～14:05	5分	地域創造挨拶・参加者紹介
	14:05 ～14:50	45分	アウトリーチ概論／児玉チーフコーディネーター
	14:50 ～15:35	45分	邦楽のいろは／谷垣内コーディネーター
	15:35 ～16:35	60分	市町村事例と邦楽公演の制作について／東松山市ご担当者（R元年度公共ホール邦楽活性化モデル事業実施団体担当者）、米澤コーディネーター、田中サブコーディネーター

※各講義とも、ウェブ会議の負担を考慮し通常よりも短い時間枠に変更して実施した。

②

月日	時間		内容
7月31日	10:00 ～10:30	30分	地域創造挨拶・事業概要説明
	10:30 ～10:50	20分	演奏家によるプレゼンテーション①（秩父市、上里町 各10分）
	10:50 ～10:55	5分	転換
	10:55 ～12:55	120分	グループミーティング①（秩父市、上里町）
	12:55 ～13:35	40分	休憩・転換
	13:35 ～13:55	20分	演奏家によるプレゼンテーション②（高松市、熊本市 各10分）
	13:55 ～14:00	5分	転換
	14:00 ～16:00	120分	グループミーティング②（高松市、熊本市）

※演奏家のプレゼンテーションおよびグループミーティングについては、コーディネーター、サブコーディネーターが2か所担当することがあったことと、アカウント数の都合で、午前午後に分ける工夫をした。



映像資料を活用した演奏家プレゼンの様子



Zoomによるグループミーティングの様子

Ⅲ-2. 令和2年度公共ホール 邦楽活性化モデル事業報告

実施団体：市民会館シアーズホーム夢ホール（熊本市市民会館）

実施時期：令和2年11月12日（木）～令和2年11月14日（土）

出演アーティスト：佐藤 亜美（箏） 佐藤 将山（尺八）

アクティビティ

タイトル：ひらけ！邦楽のトピラ～邦楽の魅力をさがしてみよう
～①

期 日：令和2年11月12日（木） 13：25～14：10

会 場：熊本学園大学附属中学校 高橋守雄記念ホール

参加者：1年C組 23名

演奏曲：「春の海」「線香花火」「秋の曲」「木枯」「津軽」

現在流行しているアニメ「鬼滅の刃」の主題歌を尺八で演奏しながら、会場の両端から登場。生徒の視線を集めた。約45分のプログラムでは、映像を活用。楽器の説明を交えつつ、日本の四季にまつわる5曲を披露した。「線香花火」の演奏前には、曲名を当てる3択クイズを出題。生徒たちは、恐る恐る手を挙げていた。うなずきながら演奏家の話を聞く生徒もいた。



タイトル：ひらけ！邦楽のトピラ～邦楽の魅力をさがしてみよう
～②

期 日：令和2年11月12日（木） 14：30～15：15

会 場：熊本学園大学附属中学校 高橋守雄記念ホール

参加者：1年A組、B組 49名

演奏曲：「春の海」「線香花火」「秋の曲」「木枯」「津軽」

前の時間より人数が多かったため、席の配置上、演奏の様子を横から見る座席や演奏家と距離がある座席が増えた。大きなスクリーンに作曲者の言葉を投影し、演奏家が東北弁を使って読み上げるなど、情景や感情を思い浮かべながら演奏を聞けるようサポート。演奏終了後に設けた質問コーナーでは、楽器の疑問等を演奏家に尋ねていた。



タイトル：ひらけ！邦楽のトピラ～邦楽の魅力をさがしてみよう
～③

期 日：令和2年11月13日（金） 13：25～14：10

会 場：尚綱中学校 大講義室

参加者：1年生 27名

演奏曲：「春の海」「線香花火」「秋の曲」「木枯」「津軽」

新型コロナウイルス感染症予防対策のため、フラットな会場ではなくステージがある大講義室で実施。尺八も椅子を使用することで、可能な限り生徒の視線と演奏家の高さを合わせた。導入部分では、佐藤亜美さんの投げかけに、生徒たちの発言が飛び交った。姿勢を前のめりに食い入るように聞いていた生徒もいた。



タイトル：ひらけ！邦楽のトピラ～邦楽の魅力をさがしてみよう～④

期 日：令和2年11月13日（金） 14：30～15：15

会 場：尚綱中学校 大講義室

参加者：2・3年生 41名

演奏曲：「春の海」「線香花火」「秋の曲」「木枯」「津軽」

生徒の視線に高さをつけるため、事前に先生が指定した席より4列下がるようお願いした。前の時間より生徒数が多かったため、座席の端に座る生徒もあり、スクリーンの大きさ、配置が難点だったが、演奏家のトークでカバーした。先生から演奏を聞く時の注意点のお話もあり、鑑賞中お互いに姿勢を正すよう促す生徒たちがいた。



コンサート

タイトル：ひらけ！邦楽のトピラ～邦楽の魅力をさがしてみよう～

期 日：令和2年11月14日（土） 14：00～15：15

会 場：市民会館シアーズホーム夢ホール 大会議室

参加者：65名

演奏曲：「春の海」「尺八二重奏曲第四番」「秋の曲」「二十五絃箏曲琵琶行－白居易ノ興二效フー」等

通常座席をパイプ椅子に変え、お客様同士の距離を取った。舞台下に仮設ステージを設置。近くで聞ける演奏会とした。楽器を知ろうのコーナーでは、楽器の歴史や奏法の説明にお客様の笑い声がもれる場面や、J-POPの演奏で高校生が食いついている場面があった。古典曲と現代曲で幅広い邦楽の魅力を伝えるとともに、超絶技巧や表現力のある演奏で観客を圧倒した。



① 応募の動機・事業のねらい

当館では、毎年くまもと全国邦楽コンクールを開催している。全国的に高い評価を受けており、今後の事業を継続・発展させるためにも、次代を担う子どもたちの理解と関心を高めるための事業実施は必須であると考えている。

今回は、日本の伝統音楽である邦楽の魅力に触れ、継承につながる人材育成を目指す、より質の高い事業を実施するため、地域創造の持つ幅広い視野と経験による支援で内容の向上を図りたいと考えた。

② 企画のポイント

アウトリーチでは、次代を担う子どもたちに邦楽に興味を持ってもらうためのきっかけづくりを目的に行った。一流の演奏家による音楽に触れてもらうことで、日本の伝統を知りつつ新たな邦楽の一面を感じられるようなプログラムを目指した。今回は、子どもたちの理解が深めやすい「四季」をテーマとし、作曲者が語る曲への思い等も紹介することで、より感情移入のしやすい選曲であった。

ホールプログラムでは邦楽に馴染みのない方にも邦楽を身近に感じてもらえるよう、有名な古典曲や流行りのJ-POPから、超絶技巧の現代曲まで、観客を飽きさせない約1時間のプログラムとした。

③ 企画実現にあたり苦労（問題となった）した点

- ・子どもたちの邦楽への理解・関心を高めることを重点に置いていたことから、アウトリーチ先は市内学校で考えていたが、コロナ禍によりアウトリーチを受け入れてもらえる学校がなかなか見つからなかった点。
- ・コロナ禍におけるコーディネーターや演奏者とのコミュニケーションの難しさを痛感した点。

また、ホールプログラム会場を邦楽の演奏会で使用したことがなかったため、数少ない舞台設備の中からできることを探りさぐり検討していった点。

④ 上記③をどのようにクリアしたか

- ・アウトリーチ先については、比較的柔軟に対応してもらえる私立の中学校へ個別に打診。アウトリーチ先を2校に絞り、同じ学校で2コマのアウトリーチを行った。感染症予防対策は、コーディネーターや演奏家の意見と学校側の意識をすり合わせて実施した。
- ・本番までコーディネーターや演奏者と直接顔を合わせるができなかったため、メールや電話、リモート会議を駆使し、綿密に連絡を取り合った。また、ホールプログラムでは、少ない舞台設備の中でコーディネーターや演奏家の求めている会場に近づけるため、舞台担当職員と連携し頻繁に情報共有を行った。

⑤ 事業を実施しての成果

アウトリーチプログラムでは、半分以上の生徒が邦楽の生演奏を聴く体験が初めてであったが、内容について95%の生徒が良かったと回答し、あわせて邦楽をまた聞きたいと90%以上が回答した。担当教師の感想でも「本物」の演奏を間近で聞き、生徒たちも興味を持っていたとあり、生の邦楽に触れられたことが大きな財産となったように思う。

担当者としては、リハーサルや準備の時間の演奏家とコーディネーターのやり取りを経験し、会場の

使い方、生徒たちへの語りかけ方、プログラム構成など細やかな工夫・配慮を感じた。これからアウトリーチ事業をする上でも参考にしていきたい。

⑥ 事業を実施しての反省点・課題

- ・担当職員の経験や知識も浅く、本番までコーディネーターや演奏家と直接打合せができなかったことから、企画内容についてはコーディネーターと演奏家の協力が大きかった。今回はコロナ禍での制限もあったが、今後アウトリーチを実施する際は、学校側と演奏家の橋渡しとして会館の役割を果たせるよう努めたい。
- ・邦楽に興味を持ってホールまで足を運ぶ人は多くない。今回は感染症予防対策として距離を置いた座席で実施したが、今後通常通りの定員で動員をかけるとすると集客が課題となる。アウトリーチを有効に使った新規顧客の開拓や広報の方法など、様々な手段を考えていきたい。

⑦ 今回の事業を通じて、自身の「地域」または「ホール」について改めて考えたこと

地域の文化発展を担う現場として、ホールに足を運んでもらうだけではなく、未来を担う子どもたちに文化芸術を届けるという役割を改めて重要に感じた。

また、今回自主文化事業担当者として初めて大会議室で邦楽のコンサートを行った。生の音を近くで聞けるため、想像以上邦楽に適していたように感じた。今後も、邦楽揺籃のまち熊本として、地域の皆様に気軽に日本の伝統音楽を聴かせる企画を継続していきたい。

「蓄積と共有」

熊本市を担当したのは宮城県出身の佐藤亜美さん（箏・二十五絃箏・尺八）と佐藤将山さん（尺八）の姉弟チームだった。（以下、敬称略）

佐藤チームを担当し、コーディネーターとして地域創造の事業に臨むのは熊本県荒尾市での「邦楽地域活性化事業」に続いて2度目となる。

佐藤亜美は2006年に賢順賞（久留米）を受賞し、2010年荒尾市で地域創造の事業を担当して以降は熊本との縁を深めていく。翌11年「第17回くまもと全国邦楽コンクール」で最優秀賞・文部科学大臣奨励賞を受賞、その後「くまもと大邦楽祭実行委員会」（事務局：熊本市民会館）が主催する『邦楽新鋭展』第4回（15年）・第5回（19年）に連続して招かれた。20年に実施した本事業までの10年間は、佐藤亜美にとってソリストとしての思いを煮詰めて来た時期と重なるに違いない。そして、佐藤亜美が訪熊（ほうゆう）した折に市民会館のご担当者は彼女の演奏に直接触れている。

今のご時世、調べようと思えばユーチューブ等のインターネットでアーティストがどのような活動をしているか等の情報は集められるが、生の演奏に触れることに勝るものは無い。生の演奏に触れる機会は、多くの方々にとって貴重な「出会い」になることは間違いないだろう。

今回熊本市での「邦楽ホール活性化事業」は大きな成果を挙げた。この背景には佐藤亜美がこれまで熊本などで積み重ねて来た「時」があることはもちろんだが、熊本市民会館のご担当者が佐藤亜美を知った上で白羽の矢を立てて来たことが大きい。ご担当者は、佐藤チームがORやホール公演で「伝えようとするもの」、そして鑑賞者・お客様が「感じ取るであろうもの」を具体的にイメージし、期待もしていたのではないだろうか。

佐藤チームは熊本市でのORに臨むにあたり、各々がソリストとして思い入れを持っている独奏曲を軸に置いてプログラムを構成した。四季の流れに沿って箏と尺八の表現力が伝えられる作品を柱とし、その中で「作曲者の人柄や作品への思い入れ」、大学時代の恩師「野坂恵子氏との出会い」や「音楽家同士が出会ったことで生まれた作品の背景」なども紹介し、「人の思い」や「出会いの大切さ」を伝えることを織り込んだ。

そして、四季の最後〈冬〉に佐藤将山は《木枯らし》・佐藤亜美は《津軽》とそれぞれのソロを置いたが、ここには郷里の宮城と同じく震災によって大きな被害を受けた「熊本への思い」が込められていた。

熊本市民会館では佐藤チームを迎え入れるにあたって並々ならぬご尽力を下さった。ORは私立中学校2校で実施することになったが、新型コロナウイルス感染症を考慮して地域創造のOR基本方針「3つの小」の内「小さいスペース」は脇に置き、各中学が付属する大学の記念講堂や大講義室をお借りする交渉をまとめて下さり、ゆったりとしたスペースで生徒さん方の間隔を空けて実施出来ることになった。又、OR当日には市民会館の舞台技術スタッフさんが随行してそれぞれのOR会場の設備をフルに活かし、普段の学校生活には無い「空間」を作り出して下さるなど、市民会館を挙げてのサポートを下さった。

ホール公演でも新型コロナウイルス感染症を考慮し、休憩無しでの60分プログラムで実施することになった。

ホール公演は大会議室（小ホール）で開催されたが、コンサートのために本舞台の前に仮設舞台を設営して下さるなど、この60分のために舞台技術スタッフの皆さんが舞台作り・空間作りに並々ならぬご尽力をして下さった。佐藤チームはこれを活かし、仮設舞台だけでなく《尺八二重奏》では本舞台も使うなど、ソロと二重奏の多様なプログラムでホール舞台の全エリアを活用した。

又、大きく力添えをして下さったのが熊本市主催「街なか花いっぱい運動」である。舞台上だけでなくホワイエやエントランス等、市民会館のいたるところに生花を飾って下さったのだ。エントランスを通り会場へと進むお客様方が、どのように眺め感じながら会場へと歩みを進めたか興味深い。

ご来場のお客様方には市内の高校2校から箏曲部に所属している若いお客様方もいて、終演後に佐藤チームと記念写真を撮っていたのが印象的であった。「このコンサートでの出会い」が、若いお客様方にとってどのような契機になっていくのかが楽しみな風景であった。

『邦楽』と『地域』それぞれのフィールドで蓄積を継続して来ているプロ同士が、お互いを知って歩み寄り、『事業の実施に向けた思い』だけでなく『先への思い』まで共有出来たら、、、、事業を成功に導くために何が最も大切かを再認識した事業だった。

アウトリーチ進行シート（熊本県 熊本市）

丹羽 梓（サブコーディネーター）

実施日	令和2年11月12日		
実施先	熊本学園大学附属中学校		
対象・実施先の情報	対象：中学1年A組、B組（男20名・女32名） 私立大学附属の中学校、大学施設内のホールで実施		
出演者	佐藤 亜美（箏）、佐藤 将山（尺八）		
ねらい／目標	ひらけ邦楽のトビラ - 邦楽で感じる四季 -		
時間	内容（Lap）	具体的に行うこと、話す内容	配置・動き等
1：55	M1「鬼滅の刃」より「紅蓮華」（1：55）	スライド：「ひらけ邦楽のトビラ」	【亜美】【将山】 上手、下手からそれぞれ尺八を演奏しながら登場
3：33	自己紹介（1：38）	【亜美】姉弟である。 両親が演奏家であり幼少期から箏と尺八に親しんできた。	【亜美】【将山】起立
4：06	テーマの紹介（0：33）	【亜美】日本の四季を、邦楽を通して感じてほしい。	
4：41	春曲の紹介（0：35）	スライド：「宮城道雄作曲 春の海（海の絵）」 【将山】のどかな瀬戸内海の春の海を表した曲。	【亜美】 箏の調整
10：49	M2 春の海／宮城道雄（6：08）		【亜美】【将山】 箏、尺八で演奏
11：49	宮城道雄の紹介（1：00）	スライド：「自分の歩くところは狭いが耳や心に感じる天地は広い（宮城道雄の言葉）」 【亜美】情景描写に優れた作曲家である。 西洋音楽の影響を受けている。	【将山】箏の調弦
12：24	夏曲について3択クイズ（0：35）	スライド：「クイズの選択肢の絵」 【亜美】クイズ「昭和の初め頃の夏の風物詩といえば？」 A「風鈴」、B「線香花火」、C「打ち上げ花火」 次の曲は3つのうちどれを題材にした曲でしょう？	【将山】ハケる
15：50	M3 線香花火／宮城道雄（3：26）		【亜美】箏で演奏
16：35	クイズの回答（0：45）	スライド：「クイズの選択肢の絵」→「線香花火が消えるまでの過程」 【亜美】正解はB「線香花火」 線香花火の変化していく様子を表現した曲。	
18：35	楽器紹介（2：00）	スライド：「4面の箏」、「十七絃箏」、「二十絃箏」、「二十五絃箏」 【亜美】箏・十七絃・二十絃・二十五絃。 音域や絃の数が違う。	【将山】箏を見せる、箏・立奏台・ピアノ椅子を 下手に運ぶ 二十五絃箏の位置調整
20：30	秋作曲者の言葉を紹介（1：55）	スライド：「三木稔の言葉」 【亜美】作曲家三木稔の言葉を紹介。 「美しくも哀しい第3の季節に触発されつつも、秋を想いながらではあったが音楽の領域を踏み外すことがないよう心がけてかいた曲」	
27：00	M4 秋の曲／三木稔（6：30）		【亜美】【将山】 二十五絃箏、尺八で演奏
27：55	楽器紹介（0：55）	スライド：「尺八の画像」 【将山】尺八 楽器名の由来を解説。 演奏した尺八3本は長さが違う。 出せる音域の違いによって楽器の大きさが変わる。	【亜美】二十五絃調弦

28 : 50	冬 曲の紹介の言葉の紹介 演奏家の思い (0 : 55)	スライド：「中尾都山作曲 木枯」、「中尾都山の言葉」 【将山】 作曲家 中尾都山の言葉を紹介（関東大震災時の言葉） 「秋も暮れた初冬の風もうそ寒いこの公園に、稍寂しい冬木立、それを吹く風に心を奪われた私は立ちつくして、楽に意（こころ）はふるへました」 自分の出身は宮城県であり、10年前の震災で大きな被害を受けた。熊本も被災の経験のある土地。自分なりに思いを込めて演奏する。	【亜美】 ハケる
34 : 45	M5 木枯 / 中尾都山 (5 : 55)		【将山】 尺八で演奏
37 : 00	曲の紹介 演奏家の思い (2 : 15)	スライド：「高橋竹山」、「野坂恵子の言葉」、「津軽平野の情景」 【亜美】 新じょんがら / 高橋竹山 に着想を得て作られた曲。 高橋竹山について紹介。 作曲家野坂恵子の言葉を紹介。 「冬、『雪と風と波の他は何もねえ』と竹山さんが言われたかの地を思い、人間を思い、私たちが生きていくことの厳しさを、そしてやがて来る春を思っって作った」 野坂恵子は自分の恩師であることを紹介。 希望に満ちた春が来るようにという思いを込めて演奏する。	【将山】 二十五絃箏を 正面位置に移動
46 : 10	M6 津軽 / 野坂恵子 (9 : 10)		【亜美】 二十五絃箏で演奏
46 : 40	結びの挨拶 (0 : 30)	【亜美】 今日をきっかけに邦楽に興味を持ってもらえたら嬉しい。	【亜美】 【将山】 起立



熊本学園大学附属中学校でのアクティビティ

実施団体：公益財団法人高松市文化芸術財団

実施時期：令和2年11月20日（金）～令和2年11月22日（日）

出演アーティスト：吉澤 延隆（箏・十七絃箏・二十絃箏） 川村 葵山（尺八）

アクティビティ

タイトル：邦楽ルネッサンス～ひらけ和の響き～

期 日：令和2年11月20日（金） 10：00～10：40（40分）

会 場：鶴尾小学校 体育館

参加者：5年生 計37名（児童30名、教員7名）

出演者が児童を迎え入れる形で待機しスタート。尺八、箏のソロ、尺八と十七絃、二十絃とデュオの曲を、曲ごとに楽器を紹介しながら演奏。また、「春の海」を題材に、出演者の演奏に合わせてボディパーカッションをするなど、耳と目と体で楽しめるプログラムにさせていただきました。※小学校に太鼓クラブがあり、6年になると総合の授業で太鼓演奏ができる環境が整っており、理解と興味関心も高かったです。



タイトル：邦楽ルネッサンス～ひらけ和の響き～

期 日：令和2年11月20日（金） 13：55～14：40（45分）

会 場：牟礼南小学校 体育館

参加者：5年生 計37名（児童30名、教員7名）

出演者が児童を迎え入れる形で待機しスタート。尺八、箏のソロ、尺八と十七絃、二十絃とデュオの曲を、曲ごとに楽器を紹介しながら演奏。また、「春の海」を題材に、出演者の演奏に合わせてボディパーカッションをするなど、耳と目と体で楽しめるプログラムにさせていただきました。※対象児童は3年時は三味線のプロの演奏を、4年時は地域のコミュニティセンターで太鼓と三味線の演奏を披露するなど理解と興味関心も高かったです。またアウトリーチ前日には、小学校の配慮でわざわざお箏を弾く授業を開催させていただきました。



タイトル：邦楽ルネッサンス～ひらけ和の響き～

期 日：令和2年11月21日（土） 10：30～11：15（45分）

会 場：玉藻公園 披雲閣 大書院

参加者：65歳以上 31名

国の重要文化財でもある披雲閣は、賓客をもてなす迎賓館としての役割も持ちあわせており、建築的特色としては伝統技術と洋風技術が見事に融合された構造となっています。プログラムは「鶴の巢籠」など古典の曲をメインに演奏を披露していただきましたが、和室と箏・尺八が共鳴しているような豊かな和音が響き渡りました。当日は、お客様が会場の雰囲気にもまれなようリラックスして待っていただけるよう、声掛けに気を付けました。



タイトル：邦楽ルネッサンス～ひらけ和の響き～

期 日：令和2年11月21日（土） 15：30～16：15（45分）

会 場：高松市美術館 講堂

参 加 者：小学生と保護者または65歳未満 38名

開催会場の美術館は、多様性に満ちたアートを紹介し新しい取り組みに積極的で、開催日も現代アートアニュアル展を開催していました。会場ではステージと照明をセットし、他会場より少しショウアップ。美術館という施設で古典を演奏する面白さを体験していただきました。この機会に、現代アートと古典の交流を図るべく、お客様へ美術館の展覧会とホール公演の相互の事業を紹介しました。美術館だけの企画としては、美術館でのコンサートらしさを出そうと、出演者が展示作品から得た印象をもとにした即興演奏を1曲交えました。

コンサート

タイトル：邦楽ルネッサンス～ひらけ和の響き～

期 日：令和2年11月22日（日） 14：00～15：45（105分）

会 場：サンポートホール高松4階 第1小ホール

参 加 者：182名 ※未就学児入場不可

邦楽が、実はこんなにも自由で楽しいということを感じていただけるよう、瀬戸内海にちなんだ「春の海」やロックミュージックの要素が取り入れられた「土声」など多彩なプログラム内容に。また1部では和装、2部で洋装と衣裳も変更していただき目で見ても楽しく。そして、コロナ禍で声を出せない代わりに、出演者の演奏に合わせてお客様がボディパーカッションをしながら曲そのものを体験できるコーナーも盛り込まれました。アンコールには「鬼滅の刃」が飛び出し、大拍手で終了しました。



① 応募の動機・事業のねらい

弊財団では、日本特有の文化や歴史の中で育まれてきた邦楽が、わが国の世界に誇るものであり、市民に日本を代表する演奏家の公演の鑑賞やワークショップでの体験をしてもらうことで、邦楽の楽しさ、素晴らしさなど、理解や関心を高めてもらい、高松における邦楽の普及と振興に寄与したいと考えています。特に、次代を担う子どもたちに、伝統音楽である邦楽を肌身で感じ、身近な存在と思ってもらうことで、先人たちが見た景色や感じた気持ち、考えを知ってもらい、これから新しいことに進んでいくヒントにしてもらうという人材育成の観点からも開催を希望しました。更に、令和2年は高松市の市制施行130周年の節目に当たることから、周年記念事業の一環としての開催を希望しました。

② 企画のポイント

【メインテーマ／邦楽をより身近に】【狙い／邦楽に馴染みのある方はもちろん、馴染みの少ない方にも楽しんでいただけるプログラム内容に。一般的にとっつきにくいと思われる邦楽が、実はこんなにも自由で楽しいということを感じてもらおう。】【地域プログラム／特に、子どもたちに優れた舞台芸術の鑑賞する機会を与えることにより、発想力やコミュニケーション能力を育成するとともに、将来の芸術家の育成や市民の芸術鑑賞能力の向上につなげる。】【公演／鑑賞対象を邦楽に携わってない子どもから一般の大人まで広い層にするため、堅苦しく、かしまって見なければならぬというイメージのある邦楽を、そうした先入観や思い込みを払拭し、もっと気軽に親しんでもらえるような視点作りを心掛ける。】

③ 企画実現にあたり苦労（問題となった）した点

- ・年度途中で担当が変わったことです。
- ・お客様のホール公演への動員を見越した企画の立案およびアウトリーチ先の選定・確保です。
- ・新型コロナウイルス感染症拡大防止および対策を講じた企画の立案と、特に小学校とのコロナ対策での交渉です。
- ・新型コロナウイルス感染症の影響により、スケジュールが想定より押したこと、何より出演者および関係者と密な打合せが困難な状況であったことです。
- ・一般的に、邦楽が身近ではないというイメージを覆すことです。
- ・ホール公演の券売に苦労したことです。

④ 上記③をどのようにクリアしたか

- ・企画のポイントでもあるメインテーマと狙いを明確にし、それらをいかに達成するか試行錯誤しました。アウトリーチ先の小学校については市内全小学校を対象にアンケートを実施。手を挙げた2校ともに和楽器に造詣と理解も深く、詳細を説明し協力を仰ぎました。市内2ヶ所の会場については、出演者と高松との出会いということも念頭に置き会場を絞込み、詳細を説明し協力を仰ぎました。
 - ・メインの広報ツールがチラシ・ポスターとなることから、邦楽のイメージを払拭すべく、色・デザインから古典を印象付けるものを排除し、キャッチコピーを作りました。
 - ・地元の邦楽団体へ広報協力を仰いだり、四国内の呉服店全店にチラシを配布したり、将来教鞭を取る可能性の高い教育課程の大学生に声を掛けるなどし、地道に取り組みました。
-

⑤ 事業を実施しての成果

コロナ禍にも関わらず、アウトリーチ会場に恵まれ、無事に全プログラムが開催できたことです。しかし、最も大切で最大の成果は、出演者お2人のお人柄、仲の良さ、何より確かな実力と楽器や各曲に対する熱意が、アウトリーチおよびホール公演のお客様にダイレクトに伝わったこと。そしてホール公演では、出演者とお客様から生まれる熱気で、生の舞台の醍醐味を感じていただくことができました。これもひとえに、過密スケジュールにも関わらず、最後までどうすればより良い演奏会になるかという1点で、全力で駆け抜けていただいた出演者のお2人と、関係者の皆さまのおかげで、アウトリーチおよびホール公演のお客様に、邦楽の魅力と面白さ、奥深さを体感していただく絶好の機会となりました。担当としても、アウトリーチ先にある環境で良い音を作る手法など、目からウロコの裏技を勉強させていただき貴重な機会を得ることができました。また、連携を図っていた地元邦楽団体から、新型コロナウイルス感染拡大を受け、公演開催やホールの利用を控えていたが、当該事業に鑑賞者として参加したことにより、特に感染症対策を講じた公演運営方法が具体的に分かり、大変参考になった。今後も積極的にホールを利用したいという声をいただきました。新型コロナウイルス感染が日増しに拡大するなかで、当初から延期または中止判断もできる状況にありましたが、当初の狙いどおり、貸館および鑑賞者も含めた日頃のホール利用者へ安心安全で運営できること、そしてご参加いただけることが示せる良い機会となりました。

⑥ 事業を実施しての反省点・課題

当該事業でメインテーマと狙いを実現するために様々企画を立案しましたが、新型コロナウイルス感染症拡大防止および対策を講じて実現させることが大変難しく、また、ホールから備品を持ち出せない、ホールの構造上希望する演出が不可能など、理想と現実の狭間で内容を固め進めていくのも困難でした。また、出演者にとっては、アウトリーチ先そしてターゲットが全て異なる過密スケジュールでとても負担が大きかったと思います。特に悔やまれるのは、今回コロナの影響で出張もできず、出演者や関係者も下見にも来られなかったため、出演者の確かな実力と魅力を事前に十分に把握することが難しく、とても惜しいことをしたと思います。当該記録DVDは、是非次年度以降の開催希望団体の方が事前資料として鑑賞できるようぜひ活用いただけたらと思います。

⑦ 今回の事業を通じて、自身の「地域」または「ホール」について改めて考えたこと

日頃から地域キーマンと連携を取ることを心掛けており、今回はその甲斐もあり企画の段階から多くの方にサポートいただき、アウトリーチ先の確保、広報・販促面で多大な協力を得ることができました。人と繋がる大切さを改めて実感すると共に、狭い地域だからこそ顔の見えるお付き合いを更に大切にし、ニーズの把握と日頃から連携が図れる体制を作れるよう更に努力したいと思いました。また、ホールへ足を運ぶ機会が少ない方に対し、ホールへ動員するためのきめ細やかな仕掛け作りの大切さを改めて実感しました。

本当に実施できるのか？ということからスタートした今回の高松事業ですが、コロナ禍の下での制約の数々をくぐり抜け、無事に実施できたことについて、ご一緒した「チーム高松」のメンバーと関係各位に、まず感謝の言葉を申し上げます。

1、コロナ禍の下での準備

チーム高松が始動したのは5月30日のzoom会議。例年に比べて遅いスタートでした。

会議冒頭で立てた方針が、「コロナ時代のモデルづくりをしよう！」ということ。まずは感染症についての知識を学び、やれることとNGなことをきちんと把握し、各種ガイドラインを頭に入れて、論理的、合理的に対応すること。同時に、もし出演者が発症した場合や、東京でのコロナ蔓延のせいで高松へ出発できなくなった場合、本事業のキャンセル可能なタイミングを想定してスケジュールを作る「タイムライン」の考え方を採ることにしました。

演奏中はマスクをせず、トーク時にはマスクを着用、ということも決めました。

そしてその上で、従来のやり方にとらわれない自由な発想で、邦楽を「私たちの時代にある魅力ある音楽」として子どもたちや地域の方々に「身近に」届けるためにはどうするのか考えよう！これが今回の私たちチームのテーマとなりました。

併せて、今回のモデル事業実施によって、今後も邦楽関係の事業がサンポートホール高松の自主事業に組み込みやすくなるよう下地を作ることも、一つのミッションとっておりました。ホールが誰を対象に何をやりたいかを明確につかみ、また邦楽が「決して遠くも怖くもない」ことを実感していただけるように進めよう、と考えました。

打ち合わせはzoom会議、メール、電話でのやりとりが中心で、リアルな活動は、9月に私と地域創造担当者だけで現地へ飛んだ弾丸日帰り下見と、10月の都内でのプログラム作成のための実地研修会のみで、最終的には、高松入りしてからそれぞれの現場でプログラムをブラッシュアップしていったというのが、今回のプロセスでした。

2、プログラム作成

まず、ホール公演用の選曲と構成を考え、地域プログラムはその抜粋版で行うことにしました。プログラム作成にあたり演奏家二人が出してきたコンセプトは以下でした。

- ・ 箏と尺八の二重奏を軸に、今日の邦楽（HOGAKU）が多様な方向性を持っていることを堪能するコンサートであること。
- ・ 西洋音楽の影響を受けて宮城道雄が作曲した「春の海」から、宮城が考案した低音の十七絃箏と、三木稔と野坂恵子が開発した二十絃箏が拓いた世界まで取り上げる。
- ・ 演奏者とお客様との関係を双方向のものとすることで箏と尺八への興味や関心をよりいっそう引き出す機会とする。

これに基づき演奏家二人は尺八本曲1曲と現代曲5曲を選び、加えて、「双方向」というコンセプトのために「春の海」を選曲。ユニークなプログラムが生まれました。

こうしたプログラム誕生には、東京文化会館で海外の最先端の音楽普及の手法を学びワークショップリーダーとして活躍している吉澤さんの豊かな発想力と経験、同じく柔らかな発想を持つ川村さんの適応力、そして二人の優れたコミュニケーション能力が寄与したと思います。特に、双方向プログラムで

ある「春の海セッション」は、今回のプログラムの肝であり、最終日のホールコンサート本番に至るまで進化し続けました。

3、地域交流プログラム

実施できるか心配した小学校を始め、アウトリーチ先は思いのほか順調に決まりました。これには、サポートホール高松が平素より学校巡回や芸術教室で小学校にかかわっており、また、地域の諸施設との関係が構築されていたことが、功を奏したように思います。

ただ、小学校への下見は、「(コロナが心配なので)敷地内には入らないでほしい」ということで、高松の担当者のみが出向き、会場、控室、搬入経路等、写真を撮ってご報告いただく形をとりました。

訪問した小学校は2校。対象となった子どもたちはいずれも小学5年生、30人ほど。

学校側は、感染防止の視点から、音楽室や教室ではなく体育館で行いたいという意向。しかもそのディスタンスは、1校目は6m(その後4mに変更)、2校目はなんと6.8m! 仕方ないとはいえ、従来アウトリーチで子どもたちがいかに近づくかに腐心してきた私たちにとって、この距離感をどう縮めるかが大きな課題となりました。

対応策として、まず体育館を横に使い、演奏者を囲むように扇型に子どもたちを配置し、心理的に近い形を作りました。また邦楽器の繊細な音色を少しでも良好に伝えようと、体育館の反響を減らすために2階部分のカーテンを閉め、ホワイトボードを演奏者の背後に置いてデッドな音響を補うなど、小技をきかせました。

プログラムは、箏と十七絃箏の曲を基本に、楽器紹介も交えた構成。「春の海」「鶴の巣籠」を除くと音楽の授業ではまず紹介されない現代の曲ばかりでしたが、子どもたちは集中して聴き、アンケートでは沢井比河流作曲「土声」の迫力が一番人気でした。「春の海セッション」もここで「初演」され、子どもたちが楽しそうに体を動かしてくれて「距離」が縮まりました。

一方、地域施設でのアウトリーチは、ホール公演のプレという位置づけで行いました。

高松側から提案されたのは、玉藻公園飛雲閣大書院という高松松平家の城下町たる伝統と格式を体現する日本建築空間と、現代美術の収蔵では質・量ともに国内屈指という高松市美術館。想定した対象は、前者は65歳以上の高齢者、後者は美術館鑑賞者でした。

飛雲閣大書院の広大なお座敷は、音響的に邦楽器にぴったりで、まさに、「ザ・邦楽」のひとつとなりました。一方、美術館の会場は講堂。美術館で演奏する意味を持ちたいと、開催中の企画展を演奏家に事前見学してもらい、その印象を即興で演奏する場面を盛り込みました。ただお客様の反応はいまひとつ薄かったのが残念。今回のスケジュール内では致し方なかったとはいえ、事前の客層の把握がもう少しできていればもう少しとんがった曲で構成したかもしれないと思うと、悔やまれます。

4、ホール公演—春の海セッション

最終日のホール公演では、演奏者2人の親しみやすいトークで進行しつつ、本格的な演奏をお聴かせしました。そして「春の海セッション」は、このホール公演で客席全員が参加する楽しいものとなりました。

セッションの概要は、まず和服姿の演奏者二人のコミカルなリードで、気分転換がてらの肩や首のストレッチに始まり、膝や腹、肩を手で打つ簡単なボディパーカッションや足踏みの練習に移り、ふっと

その上に「春の海」のメロディが重ねられ、気がつけば、みんなでいっしょに「春の海」を共演！というもの。どのタイミングで、どんな言葉と仕草でリードし、どこで音楽を重ねていくか、間合いひとつで楽しくもつまらなくもなるところを、練りに練り、本当にユニークなものが生みだせました。このセッションを経ることにより演奏者二人は客席の空気が変わったと実感したそうですが、客席側にいた私からも、お客様の音楽の聴き方がリラックスしたものに変わったと感じました。来場の1割程度が邦楽の演奏会は初めてということでしたが、その方々にも「今日のコンサートは風変わりだったけど楽しかった！」と感じていただけたと思います。

尚、今回、当日配布のプログラムでは、難しそうな用語や人名に全てルビを振っていただきました。これは必ずしも子ども向けの対応ではありません。現在の邦楽を多くの方々に開いていくためには必要なことと思います。演奏者側は、曲目解説からトークでの言い回しまで、その用語がお客様にわかるか、平易な言い換えはできないか、漢字は読めるかなど、常に意識し、邦楽の世界に閉じないようにすることが大事だと思います。

5、最後に今後邦楽事業の実施を検討されている皆さんへ

箏を触ったことがない、触らないで済ませたい、楽器のことがわからない…という邦楽器や演奏家への「恐れ」をなくすには、こうした事業を経験し、慣れていただくだけでOK、というのが私の実感です。アウトリーチで2日間4か所を回り、ホールに戻れば練習室や舞台上でリハーサルを行う中、何度も繰り返された楽器や立奏台等の搬出入とセッティング。その作業と一緒にやっていただくプロセスで、扱い方がわかり、演奏家にも親しんで、高松の皆さんのフットワークはみるみる軽くなったようにお見受けしました。高松の担当者はたくましくもてきぱきと活躍し、地域とのネットワークをそのパワーの下にしっかり築いておられましたので、あとは経験のみなのです。その背をこのモデル事業で少しでも押せたように思いますが、いかがでしょうか？

アウトリーチ進行シート（香川県 高松市）

田中 元樹（サブコーディネーター）

実施日	令和2年11月21日（土）		
実施先	高松市美術館		
対象・実施先の情報	小学生と保護者、65歳未満。事前に公募した約30名。2009年から開催されている現代アートのグループ展「高松コンテンポラリーアート・アニュアル」開催中。		
出演者	吉澤延隆（箏） 川村葵山（尺八）		
ねらい／目標	翌日にあるホール公演のプレコンサート。地域での一般向けアウトリーチ公演として、美術館の展覧会にも寄せた即興も含めて、対象者に合わせた公演にしていきたい。		
時間	内容（Lap）	具体的に行うこと、話す内容	配置・動き等
15：30：00 PM	呼び込み	ホール担当者による注意事項と出演者呼び込み。下手側控室から登場。 ※全編通して、MC中はマスク着用。演奏中はマスクなし。	箏：上手、尺八：下手。どちらもピアノ椅子に着席して演奏。 箏は使用楽器3面（十三絃2面、二十絃1面）のうち、演奏する1面は立奏台に設置。他2面は後ろの壁に立てかけ。
	1曲目（5分）	三木稔「秋の曲」より第一楽章	2人で演奏
15：35：00 PM	MC1a（2分）	翌日のホールコンサートに向けて、ホールを飛び出してプレコンサート。隣の県の徳島出身、三木稔作曲。プログラムは、秋がテーマ。最後に同曲の2楽章を演奏予定。	2人でMC
15：37：00 PM	MC1b（2分）	伝統楽器の尺八は、竹でできているシンプルな楽器だが、奏法は多様。「本曲」とは、尺八の古典。「鶴の巣籠」は他の流派でも演奏されるが、今回は、都山流バージョン。本来二重奏だが、ソロのパートのみ演奏。鶴の親子の鳴き声の模倣、羽をバタバタするなどのイメージ。	川村MC（吉澤退場）
15：39：00 PM	2曲目（4分）	都山流本曲 「鶴の巣籠」	川村ソロ
15：43：00 PM	MC2（4分）	2曲目感想。鶴のイメージ聞こえた。3曲目の「くるみの森」は、池上慎吾作曲。秋にリスや小鳥が木の実に集まってくるメルヘンチックな世界。作曲委嘱したのは、楽器屋さん夫婦の結婚式のお祝い。ちなみに今使っている楽器もその楽器屋さんから購入。箏は二十絃ではなく十三絃。「くるみ」は奥様の名前でもあり、奥様の所に人が集まってくるという様なシンボルの話でもある。	川村MC中、吉澤楽器転換。その後2人でMC
15：47：00 PM	3曲目（7分）	池上眞吾「胡桃の森で」	2人で演奏
15：54：00 PM	MC3（5分）	関東から一昨日飛行機で来た。3日間滞在。うどん食べた。初日に美術館のグループ展覧会を見た。後藤映則さんの糸を使った光の作品が、角度で違って見えた、時の流れ、光があれば続いていくもの。立体になる部分が音楽に繋がる。どの作品かは言わないが、作品に寄せて即興演奏します。ブース、不思議な感覚、キュレーターとアーティストが作り出す異空間が、この場限りであるという実感。新しい作品は捉え所ない事もあるが、同じ時代に生きてる人間の作品であるという実感を感じて欲しい。どう言う頭になってる？と思う様な作品でも、自分も見た作品への即興かもしれない、自分の心で聴いて欲しい。	川村MC中、吉澤調絃。その後2人でMC（最後川村退場）
15：59：00 PM	4曲目（3分）	アニュアル展に寄せる即興	吉澤ソロ
16：02：00 PM	MC4（4分）	即興演奏について、金属の輪を使ったり、絃の上をスライドさせて音程を変えたり、楽器を叩いたりして、多様な音を奏でた。最後の曲は、「秋の曲」の2楽章。実りの秋のエネルギーを感じる、お箏は1楽章よりも華やか、豊穣のイメージ。前曲は十三絃、次は二十絃。楽器は改良されていて、二十五絃もある。	2人でMC。吉澤楽器転換
16：06：00 PM	5曲目（7分）	三木稔「秋の曲」より、第二楽章	2人で演奏

16:13:00 PM	MC5 (3分)	アンコール。瀬戸内海の穏やかな海、お箏と尺八と言えど？ 「春の海」 海、鳥、漁師のイメージ。	川村MC中、吉澤楽器 転換。その後2人で MC
16:16:00 PM	6曲目 (5分)	宮城道雄「春の海」	2人で演奏
16:21:00 PM	MC6 (1分)	ありがとうございました。明日のコンサートについて。	2人でMC



高松市美術館でのアクティビティ

実施団体：一般財団法人上里町文化振興協会

実施時期：令和3年1月21日（木）～令和3年1月23日（土）

出演アーティスト：藤高 理恵子(琵琶) 簗田 弘大(三味線) 石田 真奈美(箏)

※新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、事業実施直前に中止となったが、予定していた内容と、経緯などについて、報告書としてまとめる。

アクティビティ

タイトル：梨花の里 アウトリーチ

期 日：令和3年1月21日（木） 10：30～11：15

会 場：社会福祉法人梨花の里 作業棟

参加者：入所者及び通所者 70名

障害を持つ方でも差別することなく文化を享受いただきたく、今回、主に知的障害者が入所及び通所している梨花の里をアウトリーチ先として選定した。生の音楽を聴いていただくことで障害を持つ方の心に少しでも癒しを与えられることを期待した。新型コロナウイルス感染症が拡大したことにより埼玉県からの通達もあり12月中旬に施設長より今回のアウトリーチを辞退したいとの連絡があり、アウトリーチ先を上里町立長幡小学校（6年生）に変更した。

タイトル：神保原小学校 アウトリーチ

期 日：令和3年1月21日（木） 13：45～14：30

会 場：上里町立神保原小学校 体育館

参加者：6年生 39名

小学校を対象としたアウトリーチは、町の教育委員会とも連携して、町の中でも児童数が少ない小学校を選定いただき、神保原小学校では6年生を対象としたアウトリーチを計画した。コロナ禍で様々な学校行事が中止、縮小される中で卒業前のイベントとして心に残るような演奏をしていただくことを期待した。

タイトル：邦楽愛好家 アウトリーチ

期 日：令和3年1月22日（金） 10：00～10：45

会 場：ワープ上里 多目的ホール

参加者：町内邦楽団体 8団体24名

町内でサークル活動をしている邦楽団体に呼びかけて8団体24人（1団体3人）を対象としてワープ上里を会場としてアウトリーチを計画した。普段より邦楽に慣れ親しんでいる方にプロのアーティストの演奏を観覧いただくことで、演奏手法や息遣い等を身近に感じていただき感動を与え、今後のサークル活動の活力となることを期待した。

タイトル：賀美小学校 アウトリーチ

期 日：令和3年1月22日（金） 13：30～14：15

会 場：上里町立賀美小学校 生活科室

参加者：5年生 24名

小学校を対象としたアウトリーチは、町の教育委員会とも連携して、町の中でも児童数が少ない小学校を選定いただき、賀美小学校では5年生を対象としたアウトリーチを計画した。コロナ禍で5年生は全ての事業が中止になったとのことで邦楽事業が5年生の心に響くイベントとなることを期待した。

ワークショップ

タイトル：和楽器体験 “ワープ上里”で初めての和楽器体験を
しませんか？

期 日：令和3年1月23日（土） 10：00～11：30（午前）
13：30～15：00（午後）

会 場：ワープ上里（上里町総合文化センター） 多目的ホール

参加者：午前の部 16名 午後の部 16名 計32名

琵琶、三味線、箏のアーティストによるワークショップだが箏は楽器の準備の問題もあり、琵琶6面、三味線10挺を用意いただき、ワークショップを開催することとした。普段、あまり馴染みのない琵琶や見たことがあり興味があっても体験したいという方を募集して和楽器に触れていただき、和楽器の演奏体験やアーティストの方との共演により邦楽に興味を持っていただくことを期待した。

① 応募の動機・事業のねらい

町内で大正琴や三味線等の邦楽楽器を演奏するサークルも複数あり邦楽に興味が無い地域ではありませんが、吹奏楽・ポップス、コーラス等の音楽に比べると邦楽の知名度が低いことも否めません。今回、邦楽のプロのアーティストによる演奏やワークショップを行っていただくことで邦楽に興味を持っていただくと共に和楽器の種類や歴史をしってもらうなど、邦楽の知名度向上を目的として事業を開催したく応募しました。

② 企画のポイント

アウトリーチでは、小学校2校を選定することを決めて教育委員会と調整してアウトリーチ先を決定しました。また、文化の社会包摂の取り組みが話題となっている中で社会福祉施設をアウトリーチ先として障害者施設を選定しました。邦楽に親しんでいる方へのアウトリーチはワープ上里で開催することとしました。コンサートでは無くワークショップを選定したのは、アーティストとのやりとりが身近に出来ること、実際に和楽器を演奏してみることで邦楽に親しみを持ってもらえることを期待してワークショップとしました。

③ 企画実現にあたり苦労（問題となった）した点

おんかつでの経験もあったのと実地研修により、アーティストの方と事前にお会いすることが出来たので、企画に関してはコーディネーターの谷垣内さん、サブコーディネーターの丹羽さん、地域創造の頼川さん、また上里町役場の総合政策課の職員の方とも連携して、進めていくことが出来ましたが、やはり新型コロナウイルス感染防止対策をどのように行うかが一番の問題になったと思います。

④ 上記③をどのようにクリアしたか

現地地下見により、アウトリーチ先の感染症対策をうかがいながら、その会場にあった感染対策を行うこととして、会場の配置を検討したり、飛沫対策としてフェイスシールドを購入する等をおこないました。

⑤ 事業を実施しての成果

今回、新型コロナウイルス感染拡大により事業は中止となりましたが、会場下見、実地研修でコーディネーター、サブコーディネーター、アーティスト、地域創造の担当の方と直接お会いし、検討いただいていたプログラムも観ることが出来て、ある程度本番が見えていた部分もあったのと、私含めて財団の職員、理事長である町長も実際の演奏を聴くことが出来たのは、今後、様々な事業を行っていく上で大きな成果になったと思います。

⑥ 事業を実施しての反省点・課題

今回は、本当に直前での中止となってしまったので担当者としては残念でなりません。開催時期（季節）の問題もあったかも知れませんが、今後、活性化事業の時期を検討することは課題の一つかと思えます。新型コロナウイルス感染症が収束することを願うしかありませんが、活性化事業の本来の姿である至近距離で身近に感じていただける事業を開催出来るようになったら、アーティストと触れ合える(や

りとりができる) 事業として企画していきたいと思います。

⑦ 今回の事業を通じて、自身の「地域」または「ホール」について改めて考えたこと

今回、ワークショップの参加者を公募しましたが短期間で定員となり、地域にも結構、邦楽に興味を持っていただいている方がいることを知りました。今後もワープ上里が上里町の文化活動の拠点となるよう事業を行っていきたいと思います。新型コロナウイルス感染症が収束したら、再度、邦楽事業を開催したいと思っています。

令和2年度公共ホール邦楽活性化モデル事業～今までにないプログラムづくり～

「3密」が新語流行語大賞に選ばれた2020年。「新しい生活様式」という言葉も生まれた。

今回の拠点となった上里町総合文化センター（ワープ上里）は埼玉県最北部、群馬県との県境に位置する。湘南新宿ラインに乗ると、新宿から最寄りの神保原駅まで約1時間半。現地下見をはじめ、楽器の手配・運搬等の点で恵まれた環境だったと思う。

担当の高橋さんは、1993年の開館以来、文化事業を担当していらした大ベテラン。オープニング公演で上原まりさん（芸名：柴田旭艶）が演奏された記憶が、今回の筑前琵琶を軸にしたプログラムの遠因となったように見受けられた。

◇アウトリーチ・プログラムについて

メンバーは筑前琵琶の藤高理恵子さんをリーダーに、長唄三味線の箕田弘大さんと生田流箏曲の石田真奈美さん。3人とも邦楽地域活性化事業の経験者だ。

筑前琵琶と長唄・箏曲は、伝統的には全く異なるジャンルに位置づく。けれども彼らは、それぞれに同じ演奏グループで活動していたり、大学の同窓生であったりという接点をもつ。いずれも弦をはじいて音を出す「撥弦楽器」を専門とする点が共通する。

言葉を、声を使って“語り”“歌って”きた日本人にとって、多彩な声の表現を支え、彩り、演出するために恰好のツールだった弦楽器。「語り」を基本とする琵琶奏者ならではの視点から、いろいろな弦楽器の魅力を伝えたい。藤高さんの強い思いがメンバー構成の核となった。

◇早め早めのスケジュールリングと密な連絡

新型コロナウイルスの影響が予測不能であること、例年、秋のシーズンには、演奏家たちは多忙を極めることから、早め早めのスケジュールリングと具体化を心がけた。

他のチームと同様に、移動制限があるなかではメールとオンライン会議が主なツールになる。疑念はすぐに解決するよう、密に連絡を取り合うように努めた。すべてのシーンにおいて、経験豊富で事業趣旨を熟知しておられ、地域の状況にも通じている高橋さんのリードに負うところが大きかった。チームメイト2年目となるサブ・コーディネーターの丹羽さんとの協働もスムーズに運び、地域創造事務局のサポートも得ながら環境を整える作業は、比較的順調に進んだ。

高橋さんは、あっという間にアウトリーチ先を調整。夏前には2つの小学校に加えて、福祉施設1か所と地域の複数の邦楽団体メンバーという理想的な構成が決まった。ホールでのワークショップも、実施したいことが明確だったので、検討も容易だった。9月の研修時に提示されたチラシ案が、10月半ばには地域に配布され、早々に定員に達してしまったのには驚いた。

12月に福祉施設での受け入れ中止が決まった時も、すぐさま別の小学校に打診、受け入れが決まった。日頃の地域との良好な関係性が窺われる。それだけに、最終的に、緊急事態宣言再発令に至り、実施を諦めざるを得なかった無念さは想像に余る。

◇現地視察と研修から見えてきたこと

第2波のピークが少し落ち着き始めた9月23・24日に、ワープ上里で個別研修を行った。3人のアーティストがアウトリーチ先訪問に同道できたのは、近距離実施のメリットである。通常は一緒に演奏す

ることがないチームが「今までにないプログラムづくり」に挑戦する以上、それぞれが現場に身を置く機会を得られたのは有難かった。とくに今年度は、行く先々での感染症対策と使用可能な機器等についての確認は不可欠でもあった。

実はアーティストたちとの顔合わせは、現地下見の一週間前の9月17日になって初めて実現した。コーディネーターとしては、事前にプログラム概要について知る機会と捉えていたが、アーティストたちは台本をもとに実際の動きを確認しようと考えていたらしい。その時点で、小学5年生の国語の教科書で扱われている『平家物語』を軸に、日本音楽の歴史を音でたどるといふ壮大なプランが出来上がっていた。ところが現地訪問の際に、一つの学校では6年生を対象とすること、福祉施設では幅広い年齢層の大勢を対象に実施することなど、いくつもの課題が明らかになった。

流動的な要素が多かった今年の特殊事情ではあるが、プログラム構築においては汎用性と柔軟性は常に心しておきたい要件の一つである。

◇実施に向けて、プログラムの再構築

体育館やそれに近い広さの場所で、子供たちの意識を引き付ける工夫は、コロナ禍でのアウトリーチの最大の課題である。小さな空間で、少人数の子供を対象に、少人数のアーティストがナマの音楽を届けるといふ、今まで大切にしてきたコンセプトが根本から揺らぐ事態に対して、どのような取り組みが可能か。メンバーたちに与えられた課題はとて大きく、高いハードルだった。

下見とホールでの研修を経て、当初の台本は一旦破棄し、それぞれに「伝えたいこと」を絞り込む作業を行った。そこから各ジャンルの音楽とアーティストの魅力をダイレクトに伝え、3人だからこそ出来る合同曲（新作）を対比的に組み合わせる方向が見えてきた。年末には、その台本の草稿が完成。年明けに打ち合わせの機会を探ろうとしていた矢先の中止決定だった。

◇特別な年の試みを活かすために

2年続けての直前の中止は、さすがに心が痛む。けれども、こうした特別な年に、いろいろな事態を予測しながら計画を練り、準備を進め、関係者間で課題を共有してきたプロセスは得難い経験だった。そうした試行錯誤のなかにこそ、新たな発見があるはずだし、何らかの可能性を見つけられるならば、この事業は格段に進化するに違いない。

頭のなかで組み立てたプログラムを現実のものとする作業は、今後に委ねられることになった。生身の人が関わるからこそ生まれる化学反応を楽しみ、新たな可能性に満ちたプログラムに成長することを心から願う。

「新しいアウトリーチ様式」における大切な3密

事業の中止が決定したのは、上里町入りの1週間前。あとは本番を残すのみという状態での中止決定はとても残念だったが、事前の準備が全て無駄になったということではないと思う。特殊な環境下で事業を実施するために、何度も話し合いを重ねて進めた準備は、今後のコロナ禍、コロナ後の事業実施に必ず役に立つのではないだろうか。

今年度の公共ホール邦楽活性化事業は、はじめから普段と全く様子が異なっていた。2回の緊急事態宣言を含むコロナ禍での事業準備と実施だったからである。「いかに感染対策を徹底しながら事業を進めていくか」という難題が、常に頭から離れなかった。

関係者全員の初顔合わせとなる全体研修会が行われたのは、2020年6月。対面での実施は叶わず、オンライン上での顔合わせとなった。その後のやりとりも、オンライン会議とメールを中心に進めていくことになった。「新しい生活様式」への転換が求められる中、私たちは事業実施に向けて「新しいアウトリーチ様式」を考えなければならなかった。

準備の過程で特にポイントになったと思うことを3密としてまとめてみた。

【過密スケジュールを避ける】

まず、6月の打ち合わせでは、実施日までのスケジュールを相談した。新型コロナウイルスの感染状況が予測できないものの、できることはなるべく早めに進めておこうということになった。そして、7月末までにアウトリーチ先を確定、9月に下見・実地研修を実施するというスケジュールに決まった。9月に下見・実地研修を行うと、本番日までに4ヶ月の準備期間を確保することができる。過密なスケジュールを避けることは、不測の事態や突然のスケジュール変更にも十分対応できる上、精神的な余裕にもつながった。

【緊密に連絡をとる】

コロナ禍では、感染状況や対策方法に地域差がみられた。また、感染拡大の状況によっては、アウトリーチ先の状況が下見時とは大きく異なっている可能性も考えられた。実施先の状況を把握するため、事業担当の高橋さんと緊密に連絡をとりながら準備を進めた。

【アウトリーチ先との親密な関係性】

アウトリーチ先のひとつである福祉施設から、感染拡大のため実施が難しいと連絡が入った。しかし、高橋さんはすばやく対応し、数日で代替りのアウトリーチ先となる小学校を見つけた。アウトリーチ実施日2週間前の見事な対応だった。

普段から、アウトリーチ候補先の人々との親密な関係性を築いている高橋さんだからこそできたことだったと思う。

今回は、これらの3密を心がけたことで、状況の変化に臨機応変に対応できたのではないかと感じた。これは、非常時だけでなく平時でも重要なポイントだと思う。

上里町で事業が実施できなかったことは大変悔しいが、今回の件を前向きに捉え、今後に活かしていければと思う。

早く感染拡大が収束し、たくさんの笑顔と共にアウトリーチができますように！

実施団体：秩父市

実施時期：令和3年2月9日（火）～令和3年2月11日（木・祝）

出演アーティスト：木場 大輔（胡弓） 伊藤 麻衣子（二十五絃箏） 島村 聖香（邦楽打楽器）

アクティビティ

タイトル：邦楽コンサート

期 日：令和3年2月9日（火） 10：40～11：30

会 場：大滝公民館 活動室2

参加者：大滝公民館利用者及び大滝地区にお住まいの方：30名

大滝公民館利用者及び大滝地区にお住まいの方に向け、定員30名で邦楽コンサートを実施。プログラムでは大滝小学校校歌の作曲者・平井康三郎による「平城山」のスパニッシュ風などを披露。邦楽器の音色と山々に囲まれた大滝公民館の立地が相まって、自然豊かな秩父ならではのアクティビティを実施できた。コンサート終了後、楽器を近くでご覧になっている方や、今回のコンサートを聴いてホール公演に足を運んでくださった方もいらっしゃった。

タイトル：邦楽コンサート

期 日：令和3年2月9日（火） 14：40～15：30

会 場：影森中学校 体育館

参加者：3年生・教諭：85名

当初は授業で三味線を選択している生徒のみを対象としていたが、会場変更に伴い、学校側からの要望を受け、3年生全員を対象とし、実施した。冒頭の「ミッション：インポッシブル」のテーマから引き込まれ、MCでは笑いも起き、良い雰囲気のコサートとなった。演奏家となった経緯やアンコールで演奏された影森中学校と縁のある「旅立ちの日に」は、今後新たな環境へ旅立っていく卒業する3年生への素晴らしい贈り物となった。

タイトル：邦楽コンサート

期 日：令和3年2月10日（水） 10：45～11：30

会 場：秩父第一小学校 体育館

参加者：6年生・教諭：25名

小学校6年生と教諭に向けて邦楽コンサートを実施した。子どもたちは、少し緊張している様子もあったが、邦楽器クイズ等を通してその緊張もほぐれていき、邦楽器の音色を身体全体で体感していた。アンコールでは、雅楽を思わせる日本音階で作曲された秩父第一小学校の校歌を今回の楽器編成に合わせた編曲のもと演奏した。子どもたちは、いつもとは違った校歌の響きや音色に驚くとともに、聴き入っていた。



タイトル：邦楽コンサート

期 日：令和3年2月10日（水） 11：40～12：25

会 場：秩父第一小学校 体育館

参 加 者：5年生・教諭：23名

小学校5年生と教諭に向けて邦楽コンサートを実施した。楽器紹介のコーナーでは、楽器の説明を聞くだけでなく、島村さんの真似をして小鼓を叩く動作をするなど、少し身体を動かして体験してもらうことができた。アンコールでは、校歌を今回の楽器編成に合わせた編曲のもと演奏し、普段とは違う響きに驚きの表情を浮かべる児童も見受けられた。校長先生からは、今回演奏した校歌の音源をいただけないかとのお言葉をいただいた。



コンサート

タイトル：邦楽への誘い～秩父に息づく龍の伝説～

期 日：令和3年2月11日（木・祝）

開場13：00、開演14：00、終演15：30

会 場：秩父宮記念市民会館 大ホールフォレスト

参 加 者：一般：182名、高校生以下：10名、ご招待：1名

冒頭から、邦楽コンサートでありながら激しい映画音楽「ミッション：インポッシブル」のテーマで観客の心を引き寄せ、その後は古典音楽から木場さん作曲のオリジナル曲、海外の民謡まで幅広い楽曲とそれに合わせた華やかな照明で観客を魅了。秩父の伝説をもとに木場さんが作曲した「水飲みの龍」を地元の読み聞かせ団体・おはなしくれよんの語りとのコラボレーションで披露し、秩父ならではのオリジナルプログラムでご好評をいただいた。



① 応募の動機・事業のねらい

秩父宮記念市民会館では、平成29年のリニューアルオープン以来、「つながる・はぐくむ・とどける」を基本コンセプトに、鑑賞事業のみならず、普及育成事業にも積極的に取り組んでいる。アウトリーチ活動では、開館当初から公共ホール音楽活性化事業及び支援事業に取り組んでおり、行政間の枠組みやジャンルを越えて様々な対象、世代に音楽をとどけることにより、豊かでしなやかな心を醸成するとともに、地域の活性化を目指している。

本事業は、当館では、これまで取り組んだことがない音楽のジャンルであり、事業の幅を広げるとともに、屋台囃子や下座音楽が受け継がれている地域として、子ども達に邦楽と触れ合う機会を創出することにより、楽器の魅力を肌で体感し、自由に想像することの楽しさから豊かな感性を育むことができると考えた。また、一連の事業を通じて、市民会館に愛着を持ち、集う人々を増やしていくきっかけとしたかった。

② 企画のポイント

[アクティビティ]

- (1) 市民会館に足を運ぶことが難しい遠い地域に住んでいる地理的距離が遠い方々のもとに訪れ、ホール以外の場所で上質な音楽をお届けしつつ、市民会館に訪れるきっかけを作った。
- (2) 地域の伝統文化の後継者育成に取り組んでいる学校を対象に、授業やクラブ活動で触れているものとはまた違う日本の伝統文化である邦楽との出会いを作った。子どもたちの気持ちを盛り上げるため、名前入りの招待状を作成し配布した。

[ホール公演]

伝説や伝統文化など、秩父に受け継がれている地域資源をプログラムに取り入れることを事業応募当初から企画しており、秩父の「つなぎの龍」の伝説を題材としたオリジナル曲を木場さんに作曲していただき、曲の演奏と地元の読み聞かせ団体による語りのコラボレーションを実現した。

③ 企画実現にあたり苦勞（問題となった）した点

演奏家、コーディネーター、サブコーディネーター、地域創造と、関係者が多く、どなたが決定権を持っているか分からず、進行に迷う場面が多々あった。

ホールでの新型コロナウイルス感染症拡大防止策は決まっていたが、アクティビティ先は会場毎に状況が異なるため、それぞれの会場に合わせた対策を考える必要があった。また、学校の体育館では会場内の防寒対策としてストーブを使用する必要があったため、それに係る準備が必要だった。

④ 上記③をどのようにクリアしたか

チェックシートや補足資料を用いて関係各所と綿密に連絡を取り合い、疑問点はすぐに連絡し、解決するよう努めた。

現地下見で会場を確認し、会場に合わせた感染症拡大防止策を先方と一緒に検討し、実施した。アクティビティ初日は、打楽器の前に設置したシールドの弛みや反射によって、楽器や演奏している様子が見えづらくなってしまったが、初日終了時に改善し、2日目はその問題も解消された。

防寒対策としては、学校所有のジェットストーブを開演まで使用し、会場内を温めたが、本番中は、

稼働音が大きいため使用できず、小学校では、参加者の周りに小型ストーブを数台設置するほか、ブランケットや羽織など、参加者自身でできる防寒対策での対応となった。感染症拡大防止策として会場内の換気を行う必要があったため、ストーブを使用しても会場内を温かく保つのは難しかった。

⑤ 事業を実施しての成果

今回のアクティビティ先は、主催事業としてアウトリーチを実施するのが初めての場所も多く、主催事業（特にアウトリーチなどの普及・育成事業）がどういったものかを関係各所に示すことができた。また、地理的距離が遠い大滝公民館でのアクティビティへの参加によりホール公演にいらっしゃった方がいたことで、今後のアウトリーチの可能性を感じる事ができた。小学校・中学校の参加者アンケートでは、「初めて見る楽器の演奏を近い距離で直接聴けた」、「和楽器について知ることができた」など、普段の授業とはまた違う体験を提供することができ、当初の目的である子どもたちと新たな文化との出会いを創出し、楽器や邦楽の魅力を肌で体感してもらうことができた。

新型コロナウイルス感染症関連としては、感染症拡大防止策を取り入れてのアクティビティ実施方法の基盤を形成することができた。今後は、換気と会場内の温度調整をバランス良く行う方法や、声楽や器楽など、実施する内容に応じた感染症対策をより模索していきたい。

ホール公演では、今回地元の神社に縁のある伝説を題材として取り上げたことや、地元で活動されている団体にホール公演に参加していただいたことで、地元の団体との繋がりが広がった。また、秩父の伝説をもとにした「水飲みの龍」を木場さんに作曲していただいたことで、当館オリジナルのコンテンツを得ることができ、今後の事業展開の可能性を広げることができた。

⑥ 事業を実施しての反省点・課題

項目③でも述べたように、関係者が多く、どなたが決定権を持っているか分からず、進行に迷うことがあったため、みんなでプログラムを作っていく、事業に取り組んでいくという共通意識を持ちつつ、個々の役割についてある程度明確にしたうえで密に連絡調整を行うことにより、事業の進行がしやすくなるのではないかと感じた。

アクティビティとホール公演を連続した日程で行うため、アクティビティ参加者にホール公演に来ていただくよう流れを作ることが難しかった。スケジュールや交通費等、様々な課題があると思うが、アクティビティとホール公演の間に期間を設けることができると、集客に繋がる可能性が出てくるのではないかと思う。

アクティビティ先として小学校・中学校を選んでいるほか、市内の各所にホール公演のチラシや情報誌を配布し広報活動を行っているが、ホール公演への若年層の来場数が少なかった。保護者や先生方など、子どもたちに直接影響を与える大人にも市民会館の主催事業や芸術文化に興味関心を持っていただくとともに、普及・育成事業についてご理解いただけるよう働きかけを行うことが重要だと改めて感じた。

また、演奏家の方々とともによりよいプログラムを作るためには、我々自身、もっと地域のことに詳しくなるとともに、アクティビティやコンサートについて、実施する目的や伝えたい思い、効果など、より明確なビジョンを持つことが重要だと感じた。

⑦ 今回の事業を通じて、自身の「地域」または「ホール」について改めて考えたこと

秩父宮記念市民会館は今年度で開館して4年目となるが、今回の事業や過去3年間クラシック音楽と演劇のアクティビティを小学校・中学校を中心に実施したことで、教育機関の中で少しずつアウトリーチ事業の存在が浸透してきているように感じた。今後も地域の芸術文化拠点として、多くの子どもたちにより近い距離で生の演奏を体感してもらうことにより、豊かな心を育みつつ、プロとして活躍している演奏家の人柄に触れ、子どもたちの将来にとって少しでも気づきやきっかけとなるような事業を行っていきたい。そのためにも、項目⑥でも述べたように、保護者や先生方など、子どもたちに直接影響を与える大人へのアプローチも積極的に行っていくことが重要であると考えている。

また、秩父市は、埼玉県内で最も面積が広く、高齢者も多い地域となっているため、市民会館での事業に興味があっても、お住まいの場所や年齢などの要因で、市民会館に足を運ぶことが難しい方も少なくない。そのような方のためにも、市民会館から離れた会場でのアクティビティも実施することで、地理的距離が遠い方にも芸術に触れていただく機会をより作っていきたいと考える。そのような機会を増やすことで、地域独自の芸術文化を盛り上げつつ、市民会館に足を運んでみようという気持ちを育んでいけるのではないかと考える。

多くの方々に、市民会館をより身近な存在として認識していただけるよう、今後も芸術文化に触れ、何かを感じてもらえるような事業を継続的に実施していきたい。

「メッセージ」

秩父市を担当したのは、胡弓の木場大輔さんがリーダーとなり箏の伊藤麻衣子さん、邦楽打楽器の島村聖香さん3名によるチームだった。

秩父市での〈公共ホール邦楽活性化モデル事業〉は、最初に開かれた「全体研修会」から印象的な場面が色々あり、思うことの多い事業であったためそれを軸に報告としたい。

・まず、令和2年6月に開催された「全体研修会」でのこと。

秩父宮記念市民会館（以下、会館）のご担当者（以下、ご担当）は、事業に向けて秩父に伝わる民話をいくつか準備なさせて研修会に臨み、『会館として誰に何を発信する事業にしたいか』を明確になさせていた。

・次いで、アーティストとコーディネーターチームが秩父に赴く「実地研修」の1週間程前のこと。

ご担当からアウトリーチ（以下、OR）にあたり、『《招待状》を作っているのでアーティストから児童生徒へのメッセージが欲しい』との連絡を頂いた。（ORは、大滝公民館：一般対象1公演、影森中・秩父第一小：学校対象3公演を予定）

《招待状》は前もってORを鑑賞する児童生徒に配布し、『ORを楽しみに待っていて欲しい』とのこと。児童生徒一人ずつの名前を入れて全員に配布するという《一手間》に、『子ども達に《どのようなORをどのように実施》したいか』という会館・ご担当者の思い入れをひしひしと感じた。

〈邦楽地域活性化事業〉が始まって以来10年あまりコーディネーターを務めて来ているが、これは初めての経験だった。

・そして、「実地研修」でのこと。

アーティストがORプログラムのリハーサルを行っているのをご覧になったご担当から、『MCの中にも子ども達へのメッセージを入れて欲しい』とのリクエストを頂いた。ここには『ORで子ども達に何かを感じ・受け止めて欲しい』という思いを感じた。

本来、【ORは音楽の授業ではなく、子ども達にとって日常に無い特別な時間である】ことはアーティストが一番願うべきことだが、会館・ご担当がこれをよく理解して実施なさせていることが、本当にありがたく嬉しかった。

派遣元である市町村ホールがORの位置付けを踏まえ、受け入れ先の学校との打ち合わせを進めて下されば、学校側との間で「事業に対しての齟齬が生じる」ことはまず無い。

そしてアーティストが、ホールが行おうとしている事業の意図やご担当者の思いを理解して共有すれば、事業を成功へのレールに乗せる最初の一步が踏み出せる。

脇に逸れるが、ここで改めて思ったのが「メッセージの受け止め方」である。

今回は色々な場面で会館・ご担当からのメッセージを受け止めることが出来たが、メッセージの「受け止め方（具合・程度）の習熟度」には差がある。

6W2Hは「受け取る・共有する・伝える」それぞれの場面で情報を整理する方法として広く用いられていると思うが、それが日常的ではない職種もあり演奏家もその一つだろう。

「情報を整理仲介するためにコーディネーターがいるのでは？」と言われてしまえばそれまでだが、

コーディネーターが常に演奏者の傍らにいる訳ではない。演奏者自らが、相手の言葉や文章からメッセージを読み取り、それを整理・理解することに習熟することはコミュニケーションを経て思いを共有するためには必須だろう。

個人的な意見になってしまい恐縮だが、5W1Hから6W2Hになり「Whom（誰に）」が加わったことが非常に大きいと思う。ORやホールプログラムが「誰に」に向けた事業か？という視点は不可欠で、これを演奏者が意識できずに実施内容（WHAT・HOW）を検討してしまうと「勘違い・間違い」をおこし、結果まで左右してしまう危険性がある。

もし仮に、送り手側で「演奏者にメッセージが伝わっていないか？」と感じた場面では、「より明快にメッセージを伝え直す必要」も、場合によっては「何度もメッセージを繰り返す必要」もある。コミュニケーションが不十分なことで市町村ホールとアーティストの間に「齟齬」が生じることは絶対に回避すべきである。

さて本題に戻るが、今回の秩父の事業では、ご担当が『夢』と語っていた事業の方向や意図が当初から明確で途中ブレなかったことが、事業の成果を高めて成功へと導いた「かなめ」であった。

しかし、新型コロナウイルス感染症緊急事態宣言が、さらに1ヶ月延長された真ただ中でのORとホール公演である。ORでは感染拡大防止のための会場設営やシールド設置等の工夫、ホール公演では集客等の事前告知から当日の会場へのお客様の受け入れ対策等々、全ての準備と実施において相当のご苦労があったことは想像に難くない。

その中、会館の全てのスタッフの方々が文字通り一丸となって『夢』を実現へと運ぼうとする姿に接し、心から敬服した。

そのお気持ち・ご努力に応えたいと思い、今回はコーディネーターとしての職域からはみ出してホール公演の演出の一部にまで口を出してしまったが、ご担当の『ご来場のお客様方に少しでもたくさん《ワクワク》してもらいたい』という思いを共有できたという（勝手な）思いからだ。終演後、緊急事態宣言下でありながらも予想以上にお集まり下さったお客様方の反応を見て胸を撫で下ろすことができた。

「誰に向けて何をするか？」が事業の核になり、それが「どんな風にどうやって」と肉付けされる。市町村ホールのご担当者がメッセージを演奏者に伝えられ、演奏者がそれを理解・共有できたら、「ORやホール事業に取り組もうとしているアーティスト」ならば可能な限りその思いに応えるだろう。

アウトリーチ進行シート（埼玉県 秩父市）

大久保 真利子（サブコーディネーター）

実施日	令和3年2月9日		
実施先	秩父市立影森中学校		
対象・実施先の情報	秩父中央部の武甲山の麓に位置する中学校。3年生の「総合的な学習の時間」において三味線を選択した40名弱を対象に音楽室にて実施する予定だったが、飛沫の飛散防止やディスタンス確保の観点から場所を体育館に変更。それにともない3年生全員（78名）を対象に実施。＜旅立ちの日に＞が誕生した学校でもある。		
出演者（編成）	木場大輔（胡弓）、伊藤麻衣子（二十五絃箏）、島村聖香（邦楽打楽器）		
ねらい／目標	奏法が異なる邦楽器三種の魅力を伝える、胡弓の魅力と可能性を伝える		
時間	内容 [Lap]	具体的に行うこと、話す内容	配置・動き等
【セッティング】 ・前列上手：木場（胡弓）、前列下手：伊藤（二十五絃箏）、後列中央：島村（邦楽打楽器） ・邦楽打楽器の前に、掛け声の際の飛沫飛散防止のためシールド（ビニールシート）設置 ・体育館での実施のためマイクを使用。ポータブルのスピーカーセットを持ち込み中央に配置。			
0：00	先生による呼び込み、入場	伊藤→木場→島村の順で入場	ドア介助
	【M1】 ミッション：インポッシブルのテーマ [2：40]	胡弓、二十五絃箏、邦楽打楽器	
3：00	【MC1】 自己紹介、M1の紹介、楽器編成の特徴 [1：30] 胡弓の紹介、胡弓の魅力と始めたきっかけ、生徒へのメッセージ、M2紹介 [3：20]	それぞれ自己紹介、全員お辞儀 伊藤：最初に演奏したのは、＜ミッション：インポッシブルのテーマ＞。こする胡弓、はじく箏、うつ打楽器、それぞれの和楽器の特徴を感じた？ 木場さん、胡弓をはじめたきっかけは？ 木場：胡弓を始めたのは、19歳の頃。元々作曲に興味があり世界の楽器を調べていたが、日本の楽器のことを一番知らないことに気づいた。特に「なんだこれ?!」と思ったのが胡弓。胡弓は、中国の二胡と勘違いされることも多いが、日本で約400年伝えられてきた和楽器。 胡弓は三味線と似た形だが、三味線のように複数の音が同時にだして、音が伸び、たとえばドとレの間の音も出せるのが魅力。みなさんも「興味がとまらない!」ということがあったり、これから出会ったりしたら、迷わず挑戦してほしい。明るい未来が待っていると思う。 次は、胡弓の魅力を伝えるために曲のほとんどを和音を使って作曲した、＜襲（かさね）＞。	木場：楽器持ち替え 島村：次曲の準備 伊藤：次曲の調絃、終了次第マイクを持って下手にはける
8：00	【M2】 襲（かさね） [4：30]	胡弓、邦楽打楽器	
	【MC2】 箏の紹介、箏の魅力と始めたきっかけ、生徒へのメッセージ、奏法の解説 [4：30]	伊藤：次はお箏について。私がお箏を始めたのは4歳の時。母がお箏を習っていて、初めて目にした楽器はピアノではなくお箏。 ちなみに皆さんお箏を聴いたことがある？見たことは？弾いたことは？（随時手を挙げてもらう） 今日持ってきたお箏は二十五絃箏。25本の絃が張られており、開発され今年で30年という新しい楽器。通常13本の絃が張られたお箏より、絃の本数が増えたことで低いふか〜い音から（実演）、高いキラッと光る音まで（実演）、たくさんの音が鳴らせる。私がこの二十五絃箏と出会ったのは高校生の時。いつか二十五絃箏を弾きたい!、そして絶対にプロになる!と思い、働いてお金を貯めて、大人になってようやく楽器を手に入れた。しかし父は演奏家になることに反対。しかし今では父も応援してくれており、好きなことをがんばっていると理解してくれるのだな、続けていて良かったなと思っている。 お箏は、右手にはめた爪で鳴らすとパリッと芯のある音（実演）、爪をはめていない指で演奏すると柔らかい音（実演）。左手も重要で、音で揺らしたり音の味付けをする（実演）。 木場さんの胡弓も改良したとか?!	木場：次曲の準備 島村：次曲の準備、終了次第マイクを持って下手にはける

	四絃胡弓の紹介、M3紹介 [1:30]	木場：伝統的な胡弓は絃が3本。でも今持っている胡弓は特注のもので、絃を低音側に1本増やした四絃胡弓。演奏の幅が広がった。 次曲は、そんな進化を続けている二つの楽器による演奏で、ギリシャ民謡《Misielou (ミザルー)》。	伊藤：次曲の準備
14:00	【M3】 Misielou (ミザルー) [3:00]	胡弓、二十五絃箏	
	【MC3】 邦楽打楽器の紹介、邦楽打楽器の魅力とはじめたきっかけ、生徒へのメッセージ [3:10]	島村：次は邦楽打楽器の紹介。私は日本舞踊や歌舞伎の伴奏などで演奏されている小鼓や締太鼓などが専門。 みなさんに質問。鼓は左手で持つが、どちらの肩に担ぐ？みなさん、左手で鼓をもった感じで担いでみて（生徒たちがやってみる）。鼓は左手で持って右肩に担いで、右手で打つ。 沢山の打楽器のなかでも私は、小鼓が一番好き。お稽古を始めたきっかけは、17歳の時に父に誘われた事。気が進まなかったが、間近で聴く小鼓の何ともいえない音色や面白い拍子に、やればやるほどはまった。「食わず嫌い」をせずにはじめてみてよかった。みなさんも色々なことにどんどんチャレンジして。どんなきっかけで世界が広がるかわからない。応援しています！	
	小鼓を分解して説明 [1:00]	島村：小鼓は、とてもシンプルな楽器。約400年前の江戸時代から形も全く変わっていない。 実は、こんな風にバラバラになる（楽器をばらす）。黒い部分が「胴」。江戸時代に作られた胴を今でも使っている。	木場・伊藤：演奏位置から離れて、邦楽器が見えやすいように左右に立つ。
	小鼓の胴の素材についてクイズ [1:30]	島村：このように丈夫な「胴」には、何の木が使われている？ 三択（生徒が手を挙げる）。 1. たんすに使われる桐 2. 仏壇に使われる黒檀 3. 春に綺麗な花を咲かせる桜 正解は3番の桜。正解者に拍手！ 桐はお箏に、黒檀は胡弓の糸巻きに使われている。	木場・伊藤：話に合わせて、自分の楽器を見せる
	小鼓の奏法について [1:30]	島村：小鼓は叩く場所と左手によって、音の高さや音色を変える。 オレンジの紐「調（しらべ）」をぎゅっと握ると高い音、離れたら低い音が出る（横向きで実演→拍手）。	
	締太鼓についての説明、M4紹介 [3:00]	島村：これは締太鼓。「秩父屋台囃子」などで太鼓にはなじみがあると思うが、この締太鼓は、皮の真ん中の白い部分「ばち革」部分しか打ってはいけない。 「ツクツクツクテン、テルツク〜」（口唱歌） 木場：突然何を言い出したんですか?!（笑い声）。 島村：これは「口唱歌」。拍子を言葉で表現（実演→拍手）。 木場：カッコいい〜。それでは次の曲ですが、これも僕が作曲した小鼓と締太鼓が活躍する《江戸の華》。	伊藤：次曲の準備
31:50	【M4】 江戸の華 [7:40]	胡弓、二十五絃箏、邦楽打楽器	
	【MC4】 M5紹介 [1:00]	伊藤：次は最後の曲、《焔（ほむら）》という木場さんが作曲した曲。映画『鬼滅の刃』の《炎（ほむら）》ではない。 木場：《焔（ほむら）》は、胡弓の可能性を感じてもらえるようにと思って作った曲。	
40:30	【M5】 焔（ほむら） [7:26]	胡弓、二十五絃箏、邦楽打楽器	全員：終了後立ってお辞儀
	先生と生徒による感謝のことば 花束贈呈 [2:00]		全員：立ったまま言葉と花束を受け取る
	【MC5】 お礼のことば、ホール公演の告知、アンコール曲の紹介 [1:50]	木場：ホール公演の告知。それでは花束をいただいたお礼に、もう1曲演奏。影森中学校といえばこの曲、《旅立ちの日に》。	秩父担当者：イーゼルを舞台に入れる 伊藤：ホール公演のポスターを掲げたあとイーゼルに置く

45:00	【アンコール】旅立ちの日に [2:33]	胡弓、二十五絃箏、邦楽打楽器	
	先生よる挨拶 [1:30]、退場	木場→島村→伊藤の順で退場	ドア介助



秩父市立影森中学校でのアクティビティ

IV. 参考資料

この資料は、邦楽地域活性化事業に参加いただき、情報提供のあった演奏家のプロフィールをまとめた「邦楽地域活性化事業アーティストプロフィール2019年度版」の付随資料として、コーディネーターの谷垣内和子氏より寄稿いただいたものです。

『邦楽アーティスト・プロフィール 2019年度版』を活用するために

2009年度に島根県でモデル事業として実施された「邦楽地域活性化事業」は、2018年度までに9回を数えた(2015年度は実施せず)。この間、関わったアーティストは延べ81名。このうち提供のあった51名のアーティスト情報をまとめたものが、本冊子である。

掲載アーティストの75%は箏の演奏家

「邦楽」という言葉には、時と場合によっていろいろな用いられ方がある。多くの場合、「近世邦楽」ともいわれる、江戸時代に誕生した音楽を指す。そのなかでアマチュアのお稽古事として長い歴史を持ち、教授者と愛好者が最も全国的に展開しているのは「三曲」(箏・三味線・尺八の音楽)といえる。こうした事情から、箏のアーティストを中心にチームが編成されてきた。

箏の演奏家は、三味線も弾けば歌もうたう

箏(箏曲)と三味線(三曲では「三絃」と呼び、音楽を「地歌」という)*と尺八は、古くから密接に関わり合いながら発達してきた。盲人音楽家が担った箏と三絃に対して、尺八は^{ふけしゅう}普化宗の虚無僧が専門とした。

伝統的に箏と三絃の両方を演奏出来ることがプロアーティストの条件であり、その音楽を「箏曲地歌」「地歌箏曲」と総称することも多い。器楽曲もなくはないが、大多数が箏や三絃による弾き歌いである。

明治期に既存の地歌箏曲のレパートリーに尺八を加えて演奏する「三曲合奏」が大流行するようになり、これらに関わる職能領域を「三曲」と総称するようになった。

*「三弦」「地唄」の表記も用いられ、演奏家の多くは「絃」「唄」の文字を好む傾向が強い。本質的な相違はなく、ここでは冊子の表記に従う。

～時代のニーズとともに発展した箏曲～

長い年月をかけて創作活動が続けられるなかで、レパートリーの淘汰が進む。新たなスターが生まれれば、その下に集う人々がまた新たな集団を形成し、新しい流派が誕生する。時には新しい楽器の考案も試みられる。新たな表現手段は、さらに次の創作を生み出す。こうした循環が積み重なって、現代の三曲界が形成された。

器楽の生田流vs声の山田流

生田・山田は箏曲の流派名である。生田流は関西を中心に地歌とともに発達した。地歌・箏曲演奏家を名乗るアーティストは、この系統に入る。四角い爪を使い、さまざまな器楽的表現を追求し、新しい楽器の考案にも積極的である。

山田流は、近世箏曲の創始者、八橋^{やつはしけんぎょう}検校(1614-85)の死から約100年後に江戸で誕生した。箏本位の音楽で、箏2面+三絃1挺の編成が標準である。三絃は必須アイテムだが、この系統のアーティストは、山

田流箏曲演奏家を名乗る。中央が尖った爪を使い、ドラマティックな声の表現（歌）を大切にする。これらの違いが、創作に意欲的な生田流 vs 古典重視の山田流という姿勢の遠因となった。

【生田流のアーティストたち】

最も有名なのは、「春の海」の作曲者である宮城道雄（1894-1956）。数多くの名作を生み、合奏で低音域を担う十七絃のほか、大型の胡弓も考案した。その流れに連なる沢井忠夫（1937-97）は、現代的な創作活動を積極的に展開し、作品の多くはアーティストたちの憧れの的になっている。

沢井と東京芸大で同窓生だった野坂恵子（後に2代野坂操壽。1938-2019）は、独奏楽器としての箏の可能性を探求するなかで二十絃箏を開発。1991年に二十五絃箏として完成させた。伊福部昭をはじめとする現代作曲家への委嘱を行い、新境地を拓いた。

このように宮城道雄以降、多くの生田流アーティストたちが現代邦楽を牽引してきたといっても良い。本冊子のなかで十七絃、二十五絃箏などを掲げるアーティストは、箏を中心にした現代作品に比重を置き、箏曲以外の領域とのコラボレーションにも積極的である。

これらに対して、古典の伝承に心を注ぐアーティストたちも多い。扱う楽器は「三絃、箏」とシンプルだ。繊細な地歌三絃の弾き歌いに箏を重ねる合奏形式は、日本人が大切にしてきた美意識を映し出す。

【山田流のアーティストたち】

山田流は江戸を中心に発達したせいも、現代でも東日本を中心とする傾向が強い。豊かな声の表現を大切に、レパートリーのほとんどが古典である。関西系の地歌箏曲の作品も扱うが、箏本位にアレンジされるケースが多い。近代の作曲家では中能島欣一（1904-84）が有名で、技巧を凝らした作品の多くは、今もなお挑戦意欲を刺激する対象となっている。

なお、山田流独自のレパートリーでは、地歌の三絃とは異なり、棹が細く、やや小型の撥を用いる。どちらかというとき長唄三味線に近い。そのせいも、三味線による現代作品に意欲的なアーティストを輩出することにもなった。また、中能島と同年代で、東京盲学校で学んだ久本玄智（1903-76）の流れを汲むアーティストも創作への関心が高い傾向がある。

尺八の二大流派、琴古流 vs 都山流

江戸時代中期に江戸で誕生した琴古流に対して、都山流は明治期の関西で生まれた。どちらもオリジナル・レパートリーを本曲というが、琴古流はいくつかの虚無僧寺に伝えられていた尺八曲を黒沢琴古（1710-71）が収集し、整えたものを基本とする。

都山流は、初代中尾都山（1876-1956）の作品を基本に、その後の演奏家の作品を組み入れて本曲とする。そのため歴代の都山流尺八演奏家たちは創作に意欲的で、その傾向は今に受け継がれる。最も有名なのは山本邦山（1937-2014）で、国内外の多種多様なアーティストとのコラボレーションにも取り組み、数多くの作品を残した。

なお、流派に所属しないアーティストも少なくない。彼らは、各地の虚無僧寺に伝えられた個性豊かな古典本曲を主要なレパートリーとするほか、現代的な創作の世界に関わるケースが多い。

～アーティストの名前（芸姓、芸名）～

物事の帰属を重視する日本文化。邦楽では、アーティストが所属する流派や芸の系統を明らかにするために、「芸姓」「芸名」といって、演奏家としての姓や名前に師匠の名前の一字を譲り受ける習慣がある。パッと見て分かるようになるには経験が必要だが、知っているると便利なことも多い。

本冊子に掲載されるアーティストを中心にみると、尺八の琴古流では「鈴」「盟」、都山流では「山」を名前に付ける。生田流では、箏曲宮城会や沢井箏曲院、京都當道会、九州系などは本名だが、正派邦楽会は「雅楽」「雅」、野坂操壽一門は「操」を付す。「菊」が姓に冠されるのは、大阪に伝わる古典中心の芸系の一つ。山田流でも本名で活動するアーティストがいる一方で、芸名としては「勢」「能」「博」「千・代」などが付される。

今日では、大学などの教育機関のほか、公的な研修制度を利用して、他派の指導者の下で学ぶ機会も増えている。結果的に複数の師弟関係を持つケースが生まれているほか、活動シーンによって本名と芸名を使い分けるアーティストもいる。

アーティストの専門領域について

箏、三絃、十七絃、二十五絃、胡弓、尺八、作曲などの記載順は、それぞれのアーティストの活動領域における優先（得意）順位を示す。楽器の数が増えるにつれて、現代作品や創作への関心が高いことが読み取れる。前述の通り、歌をうたうのは当たり前なので記していない。

参考のために、本冊子に登場する三曲のアーティストたちが専門とする楽器と流派(芸系)・レパートリーの傾向を別表(※)に示した。アーティストの個性は常に例外を生み出すことをお含みおきの上、参照していただくと幸いである。

ところで、三曲以外で事業に関わったアーティストの多くは、既存の領域を超えた活動に特色がある。以下に、三曲以外の専門領域についてまとめておきたい。

【長唄三味線】

歌舞伎とともに発達してきた長唄は、複数の唄と三味線、囃子がセットになって上演するのが標準である。唄と三味線は分業が基本で、特別な演出効果を狙うときでもなければ独奏シーンはない。三曲のように、一人でも完結する音楽とは異なり、ユニークな表現を追求するなかで、現代作品にアプローチする傾向が強くなる。とくに長唄三味線の演奏家だった杵屋正邦(1914-96)は、三味線の現代的表現を追求した作品を数多く作曲し、大きな功績を残した。

【能管・篠笛】

歌舞伎をはじめ、地方の神楽や和太鼓の演奏シーンで活躍する笛の演奏家は、能で用いられる能管とお祭りなどで馴染みのある竹笛(篠笛)の両方を使い分ける。ジャンルを特定せずに、さまざまな領域で自由な表現が展開できる楽器といえ、現代作品で活躍する機会が増えている。

【琵琶】

薩摩琵琶と筑前琵琶の2種類がある。前者は鹿児島を中心に18世紀半ばに発達し、後者は明治中期に博多で誕生したという。どちらも琵琶を弾きながら物語を語る芸能である。古典の作品は、題材的に現代社会に馴染みにくい性格もあるが、武満徹の「ノヴェンバー・ステップス」や「エクリプス」など、個性的な音素材として用いられるケースが相次ぎ、活躍の場が広がった。

【胡弓】

日本で唯一の弓奏楽器だが、誕生は謎に包まれている。盲人音楽家が伝承に関わり、江戸時代中ごろには、関西と江戸とで二つの流派があった。三曲における第三の楽器として愛好されたが、尺八優位の環境下で演奏者が激減。宮城道雄は音量の大きな「大胡弓」を考案したが、レパートリーも演奏者も限定される傾向がある。

三曲に対して、古くから歌舞伎・文楽、民謡の世界でも用いられてきた。ジャンルをあまり特定しない存在だったともいえる。今日では新たな表現素材として注目され、楽器改良と創作活動を展開するアーティストも登場してきた。

【津軽三味線】

津軽地方の民謡の伴奏から全国的な人気を獲得。和太鼓とともに国内における邦楽公演のかなりの部分を占め、国際的にも認知度が高い。

～古典vs創作～

古典では型や様式が重視され、楽器編成にもルールがある。長い年月を経て、多くの人の目と耳を通して淘汰され、磨かれてきた作品や表現の美しさは捨て難い。それに対して、伝統的なジャンルを超越したコラボレーションや今までにない表現や演奏の場等を追求するのであれば、新たな創作の道を選ばざるを得ない。古典と創作は、常に相対的な関係性のなかにある。

箏曲の歴史を眺めると、宮城道雄の登場によって大きな転換期を迎えたことは確かである。それ以前を古典、それ以降は現代と捉えることもできそうだ。その関係は、この先、随時書き換えられて行く宿命にある。

それぞれのアーティストが得意とする領域と個性をどのように活かして、邦楽の世界を拓けることが出来るか。関係者の知恵と覚悟が求められている。

※別表

大ジャンル	楽器	小ジャンル	主なレパートリーと系統 種類	箏曲（生田流系）			箏曲 (山田流)	尺八楽			
				古典	宮城道雄以降			古典	琴古流 本曲	都山流 本曲	虚無僧系 本曲
					宮城・ 正派系	沢井系	野坂系				
三曲	箏	箏曲（生田流系）	二十五絃箏				○				
			二十絃箏				△				
			十七絃		○	○	○				
			箏（+歌）	○	○	○	○				
		箏曲（山田流）	箏（+歌）				○				
	三味線	地歌	三絃（地歌）（+歌）	○	○	△	○	△			
		箏曲（山田流）	三絃（山田流）（+歌）					○			
	胡弓	胡弓楽	関西系	△							
			宮城胡弓（大胡弓）		△						
	尺八	尺八楽	琴古流					○			
都山流								○			
虚無僧系									○		

**令和元年度・令和2年度
公共ホール邦楽活性化モデル事業報告書**

発行：一般財団法人地域創造

〒107-0052

東京都港区赤坂2-9-11 オリックス赤坂2丁目ビル9階

TEL：03-5573-4064

FAX：03-5573-4060

URL：<http://www.jafra.or.jp/>

発行日：令和3年5月

